Madeniter

での

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｄｅｎｉｔｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ１７０３Ｄ

【作者名】
での

【あらすじ】
お人よしの魔王とその仲間が繰り広げるほのぼのファンタジー！！を目指していたはずなのだけど・・・

プロローグ

大きな鐘の音で目が覚める
魔族が夜襲をかけてきたらしい
急ぎ装備を整え外に出る
既に外にはリファレウス第３小隊の面子が揃っていた
私は伝令兵のシグに現在の状態を聞き耳を疑った
既に第１小隊と第４小隊は壊滅
リファレウス随一の剣豪『ルード・リファレウス』の戦死
敵襲を報せる鐘が鳴ってから
まだ数分とたっていない・・・
気がおかしくなりそうだった
幾度も攻めて来た魔族の軍勢を返り討ちにし
難攻不落と謳われていた
軍隊の４分の１と
剣聖とまで言われた人物を数分で失ったのだから
さらにシグは続けた
「魔族側の軍勢は１・・・」

と言って、少し言葉がつまりった
表情に生気が感じられない
少し間をおいて、シグはかれた声で続けた
「攻めてきたのは『魔王　ディノ・ヴェルン』です」
小隊がしんと静まり返った
おかげで、城の方の悲鳴・断末魔が良く聞こえる
最悪だ・・・
魔王に攻められて
堕ちなかった場所は無いと聞いている
そして
常に一人で攻めてくると
冗談だと思っていた
真っ当に考えるならば
ありえる筈が無いと
チームワークの取れた複数人が相手ならば
一人側がなす術なんて何も無い
一方的な暴力になるだけだ
ましてや
一人対数十人ならば尚更だ
しかし

数分で第1小隊・第4小隊が壊滅している
真実と捉えるしかない

魔王と戦えば
私の小隊も恐らく・・・

私は目を閉じ、一息ついてから
絶望の表情に打ちひしがれた
小隊の面々に向って話した

「恐らく、我々の隊は魔王との交戦で全滅するであろう
逃げたい者は逃げていい、ただ城下町の町民の避難の手助けをしてくれ」

私はここで一度、言葉を句切り
声を荒げ、叫ぶように続けた

「我々は今から魔王と交戦し時間を稼ぐ
稼げる時間は僅かであろう
しかし！！僅かな時間であろうと
町民を避難させるには十分な時間は確保する！！
いいかこれは絶対だ！！！！！
私と共に行く命知らずはついて来い！！！！！！！！！」

第3小隊は魔王がいる城門に向って突撃した
城下町に下りる者は一人もいなかった・・・

城門までたどり着くと
第3小隊を除く小隊が全滅していた

辺りは赤黒い水溜りができていて
その中には、まるで鋭利な刃物でチーズを切ったみたいに
綺麗に真っ二つに切れている人・人・人

彼らと酒を飲み交わす事も、もうできない
これが単なる悪夢であるならば早く覚めてほしい

赤黒い水溜りの上に
銀色の髪をした１０歳ぐらい子供が立って泣いていた・・・
その子供の服はまるで返り血を浴びたかのように
赤黒く染っていた

我々は直感で気がついた
そして愕然とした

魔王が人の子供のような容姿であり
泣いていたから

「隊長？」

隊員のミルザに声をかけられ
はっと我に変える
隊員は既に魔王の周りに陣形をとっている

子供に見えていても
目の前に立って居るのは魔王だ
数十分で全小隊を殲滅できるほどの強さをもった・・・

油断していたら殺される

私は剣を構え臨戦態勢をとった
「我々の目的を忘れるな、冷静に動け」

「こんな状況で冷静になれって、無理を言うな！！」
私の後方でキーウィが捩弓を構えている
表情では怒りしか読み取れない

―◇―

捩弓とは弦が通常の弓より長い変わった弓だ
弦を捩り弾くことにより
矢に鋭い回転が加わり
岩をも貫く威力になる

ただ、真直ぐ射るには鍛練が必要だが

―◇―

その表情の反面
行動は落ち着いていた

声は隊長にだけ聴こえるように最小限に落としており
完全に魔王の死角であろうポジション
矢の先端は真直ぐ魔王の頭を捕え
引かれた弦はキリキリと音を立てていた

飛び道具を使用する場合
狙うのは主に心臓
それは
仮に心臓から外れても

体の何所かに当り
相手の動きを少しでも封じるため

しかし
キーウィにそれは無い
常に狙いは頭

『死ぬならば
せめて苦しむ間もないぐらい
一撃で確実にしとめる
それが
死に逝く者への数少ない思いやりだろう』
彼の口癖だった

幾千・幾万と日々繰り返した鍛練は
彼にミリ単位の誤差さえ許さないほどに
体に染み付いている

故に一撃必殺

彼は弓と自身とを一体化させ
右手の指の力を緩めた

―◇―

『ぴちゃん』

赤黒い水溜りで音がした

水溜りに魔王がいない

只波紋が広がっているだけだった

私がそれを意識したと同時に
首や背中に生暖かい液体がかかった

この感触は血だ

驚き振り向くとキーウィが絶命していた

矢は無人の空へ向って飛んでいった

一瞬だった・・・

キーウィの立っていた位置から
魔王が立っていた位置まで５０メートルはあったはずだ

その距離を一瞬で縮め一閃
格が違いすぎる

目の前の景色が歪む歪む
時間を稼ぐことさえも無理に思える
絶望したらダメだ・・・考えろ

次の瞬間
魔王の背面からミルザが
側面からグルガが斬りかかっていた

ただ、斬りかかった刃が魔王に届くことは無く
２人とも力なく地に崩れ落ちた

魔王と対峙してから
まだ2分とたっていないであろう
我が第3小隊もほぼ壊滅していた

私は叫んだ
「シグっお前は城下町に退却し町民を逃がせ！！
魔王は私が引き止める！！！」

「しかし・・・」
シグが何か言おうとしていたが
私は続けた

「反論は認めん！！
もうリファレウスの騎士団はお前しか残っていないんだ！！
退却しないようならば、私がお前を斬る！！！」

「心配するなお前は殺させない
それに私には秘策がある」
私はシグを心配させまいと
シグのほうを向きそういって精一杯の笑顔を見せた、
恐らくその笑顔は引きつってただろうし、
秘策などなかったのだけれども

シグが城下町の方へ走っていく

絶対にシグを追わせる訳にはいかない
私は魔王の方を注視し、
腰を低く構えた

意外な事に魔王はシグを追いかけなかった・・・

それどころか、まだ泣いている

「なんでみんな死にたがるんだ！！」
「殺しにこなければ・・・死なずにすんだのに」
魔王は泣きながらそう言っていた

この言葉は腑に落ちない、
「攻めてきたのは貴様のはずだ！！！」
私は怒りのまま思った事を口に出していた

「僕は数日後にこの城の騎士団が、
カーバンクルの集落に攻め込むといった情報を聞いて
それを止めてもらうよう説得に来ただけだ・・・
あいつらは好戦的な種族じゃないから、
そっとしておいて欲しかった」

確かに数日後に魔族の集落を攻める作戦が入っていた

そもそも、今は戦争中だ
好戦的でなくても魔族は敵で
滅ぼさないといけない

「3ヶ月前に行った城でもそうだった・・・
ただ、近隣に住む弱い魔族の集落を攻めないでくれと
説得しに行っただけなのに」

驚いた・・・本当に魔族の王なのか？
考え方がまるで子供だ
魔王が直々に、しかも一人で城や街に行く

その理由が、弱い魔族の集落を攻めないでほしいとの説得するため
まさに殺してくださいと城にや街に行っている様な物だ

結果は逆で城や街が壊滅してしまっているのだが

もうシグは城下町に付いた頃だろうか・・・

私は第３部隊隊長として逃げる訳にはいかない
時間は稼げたかわからない

せめて相打ちにはもっていきたい
私は辺りを見回した・・・

今魔王のいる位置の後ろには火薬庫がある

キーウィの打った矢が私の右手に落ちている

矢を火矢にして火薬庫に射ち込む
私にはそれ位しか思いつかなかった

数日後の作戦の為に
大量の火薬が火薬庫には入っている

城門やその周辺が跡形もなく吹き飛ぶほどに

問題は魔王に斬られるより速く射ち込めるか
迷っていてはダメだ・・・やって見るしかない

私は足で矢を救い上げ
軽い程度の魔法なら使えるため

矢の先端に火を放った
火薬庫に向けて矢を射ち込もうとした
魔王がこちらを向いた
ミルザとグルガの亡骸が
魔王と私との直線状にあった
魔王が死体を飛び越す
その飛び越すといった
僅かコンマ数秒の行動が生まれたおかげで
私が火薬庫に向けて矢を射ち込む事が出来た

「ごめんなさい」
魔王の謝罪
今まで色んな人の謝罪を
聞いてきたが
それらのどれよりも
深い気持ちがこもっていた

勢いよく噴出する血
薄れゆく意識

あぁ
この子は多分
純粋な子なんだ

純粋な故残酷
敵と認識をすれば容赦が無い

ただ・・・

「戦争でなければ
私の息子と良い友人になってもらいたかっ・・・」

そういい残した次の瞬間に
私の意識は途切れた・・・

『リファレウス第３小隊　ベルト・オルランド死亡　享年４２歳』

15年戦争

長い間人間と魔族との戦争は殆ど無かった
あったとしても近隣の領土での小競り合い程度

仲が良かったという事ではなく

戦争が無かったは
他の種族に構っている暇など無かったから

つまり
人は人同士
魔族は魔族同士で戦争をしていた・・・

しかし
とある魔族の男が来てから
魔族は変わった

数百年前に行方不明なり
ずっと語り継がれてきた男
『魔王グライス・ヴェルン』
が現れたのだ、幼い息子たちを連れて

もちろん、
本人を知る者は殆どおらず
同じく行方不明となっていた
代々、王のみが所有できるローブを羽織っていた事で
魔王と言う事が証明された

グライスは王座に座ると
終始、魔族同士の戦争を終らせる事に取り組んだ
結果１０年で魔族同士の戦争は殆どなくなっていた
戦争への始まりは突然であった
『魔王グライス・ヴェルン』が何者かに暗殺された。
即位したのは息子のディノ・ヴェルン
当時４２歳　人間の年齢にすると８歳ぐらいらしい
幼すぎるため
５賢帝の一人で幼い頃から
ディノの世話をしてきた
スルト・ヴェドガムを補佐として置いた
幼き魔王も
その補佐であるスルトも
急に前魔王が亡くなったための
内部統制等に追われ
殆ど外（人間側）の情報を得ていなかった
外では戦争へのカウントダウンが始まっていた
人間側で城主など主要人物数人が次々と暗殺されると言った事件が
起きていた
特に殺された人物に関連は無かったが
殺され方は同じで

全員首の頚動脈を切られていた

各国は初め敵対国の暗殺者かと思っていたが
敵対しあっていた両国の用心が暗殺されたので
無差別殺人と言う事になった

放っておくと、各国に大きな損害がでる
いがみ合っていた国同士さえ
犯人を捕まえるために一時的に協力関係になっていた

用心暗殺が始まってから1週間
犯人が捕まった

犯人は魔族だった
リファレウス王を暗殺しようとしていた所を
ルード・リファレウスが素早い動きで之を捕らえた

ルードが動機を聞くと

「魔王様の命令だよ！！」

そういい残して魔族は自決した
首には変な模様が浮んでいた

ディノが魔王に即位してから2週間後のことであった

各国の要人を暗殺され
その差し金は魔王だった

その話は、各国に知れ渡り
各国が魔族との戦争の準備を始めた

ディノがその事を知るのは
最も人間の領土に近い街
シーダタウンが人間の軍に占領されてからであった

戦争の当初は強襲を仕掛けた人間側が押していた
僅か2年半で魔族の領土の4分の1を攻め落としていた

しかし、戦局は一変する事となる

戦争が始まって3年
魔王ディノ・ヴェルンが戦線に出て来た

ディノが10年間で落とした城や街は32ヶ所
殺した人間の数は数万を超えていた・・・

戦争が始まって12年目
5賢帝でありディノの補佐についていた
スルト・ヴェドガムが北方にて行方不明になる

その1年後
ディノとギナム・オルランドの一騎打ちでの闘いが起こる
勝負は互角であった
が、途中邪魔が入ったため決着はつかなかった

この闘いでディノは重症を負い
行方不明となった

魔王が行方不明となった事で
再び人間の軍が勢いづくこととなった

しかし、唯一魔王と互角に渡り合った
ギナム・オルランドが魔族討伐に乗り出す事は一度も無かった

戦争が始まって１５年
ディノは行方不明になってから2年で魔王城へ帰ってきた
そして、人間・魔族間の停戦をうったえかけた

人間側もギナム・オルランドがディノに同調し停戦をうったえた

元々、お互いに利など無い戦争であった

疲弊しつくした両軍は一触触発の雰囲気を残しつつ停戦をした

１５年間続いていた戦争が終了した

１５年戦争から３０年がたった
再び魔王が行方不明になった

満月の夜

夕暮れ時の小道を２人の男が歩いている
２人とも若く１８～２３歳くらいに見える

片方の青年は
１９０ｃｍをゆうに超えるほど長身で
金色の髪は腰の辺りまで伸びている

もう片方の青年は
身長は１８０ｃぐらいで
首の辺りまで黒い髪が伸びている

長身の青年が
もう一人の青年に言った
「ディノス、この近辺に町か村はないか？」

ディノスと言われた黒髪の青年が地図を見ながら答えた
「そうだね、地図を見た感じだと
　このまま後２０分ほど歩いたら小さい街があるよ」

「今日は野宿をしなくてすみそうだね」
と、ディノスはにこやかに言った

「じゃあ、さっさと行くぞ」
長身の青年が早足で歩いていく

「ちょっと、ウィル早いって」
と言って、ディノスが笑いながらついて行く

１５分ほどしたら目の前に村の入り口が見えてきた
何処の村にも遠方から来た人のための休憩所があるので
２人はそこで宿をとるつもりだった

２人が村に足を踏み入れたとたん
２人を目掛けて刃物が振り下ろされた

「危ないな～」
ディノスはそういって
軽々と刃物を避けると

刃物を振ってきた人物をひょいと持ち上げた
まだ、１１～１２歳くらいの子供だった

「はなせ～魔族は殺してやる！！！」
ディノスに捕まれた子供が足をバタバタさせている

もう一方ではウィルが
もう一人の子供の首根っこをつかんで地面に叩きつけてた
鬼の形相になっている

「俺は、魔族が大嫌いなんだよ」
「そんな魔族といっしょにするなんて、テメー死ぬか？」

―◇―

地面に背にして、目の前には怖い形相をした男・・・
リプロは恐ろしさの余りに声がでなかった
男が強い力で押さえつけているので逃げる事さえできない

『この人本気だ・・・・』

―◇―

「ウィルやめろ！！」
「お前たちやめんか！！」

ディノスの声とお婆さんの声が同時に街に響いた

ウィルの動きをとめて
お婆さんの方を見た

子供が2人お婆さんの方へ
泣きながら走っていく

「すみませんな、旅の方」
お婆さんはそういって一礼した

「このお二方は人間じゃよ」
子供たちをあやしながら言った

「え～でもお婆ちゃんが
魔力を感知したっていってたじゃん」
一人の子供が顔を膨らませて講義している
さっきウィルに地面に叩きつけられた子だ

「僕たちそれで、今度はあいつ等かその仲間が来たのかと思って」
もう一人の子が俯いて申し訳なさそうに弁明している

「あっ・・・・」

ディノスはそういって気まずそうに顔をそらした
「多分、魔力を感じたってのはこの人形ですよ」
そう言って、変てこな人形を取り出した
お婆さんは納得したように言った
「確かに、その人形から魔力を感じるのう」
「きさまのせいか・・・・!!!」
ウィルの怒りは治まっていなかったらしく
ディノスは思いっきり殴られた
記憶が5秒ほどとんだ気がした
「いたたた・・・本気で殴る事ないじゃないか」
ディノスは腹話術を使って人形で喋った
「もう一発殴られたいか」
とウィルが握りこぶしを作っている
「凄い凄いどうやってその人形に喋らせてるの？」
そのやり取りをみて子供達が笑っていた
「しかし、何故俺たちが襲撃されないといけないんだ？」
ウィルがお婆さんに尋ねた
「すまんのう、三日ほど前に魔王を語る者らが現れて・・・・」
魔王!!
この単語を聞いた途端にウィルの目が鋭くなった
『情報は本当だったか!!』

「奴らは今何処にいる？」
ウィルはお婆さんが何か言おうとしていたのを遮り
詰め寄った

「向こうに見える山に篭っているはずじゃ、村に・・」
お婆さんは其処まで言って、話を止めた・・・
既に目の前にウィルの姿はなかった

「ディノス行くぞ～～！！！」
子供たちと遊んでいたディノスの首根っこを捕まえて
ウィルは山に向かって走り出した・・・

「お婆ちゃんあの2人大丈夫かな？」
走っていく姿を子供達が心配そうに見つめている

「あの金髪の兄ちゃんは人の話もろくに聴かないで走っていったからねぇ」
「あいつ等の恐ろしい力を知らずに・・・」

「でも・・・」

「無事に戻ってくるだろうて、この村も元通りになる」

そういってお婆さんは、混沌とした左目でディノスを見つめていた

「またロクに情報を集めもせずに・・・」
「それに、夜に山に入るのは危ないよ・・・暗いし」
ディノスは溜息をついている
まだ、ウィルに首根っこをつかまれて

引きずられながら

「大丈夫だ今日は満月だからそれほど暗くない」
ウィルはそう言い放つとどんどん森の奥深くへ進んでいく

「子供たちから聞んだけど、魔王って名乗ってるやつは禁術になっている魔法を使うらしいよ」
ディノスが少し心配そうに言った

「禁術？どんなのだ」

「えっと、人の五感を一日に一つずつ駄目にしていって、で6日目には心臓が止まって死ぬって魔法」
ウィルの顔に怒りが滲んでいる
「それでやつらは近くに滞在していて、6日間村の人たちが苦しむのを見ているって言うのか！！！」
怒りに任せて
思い切り木を叩いた

木が揺れ
満月の月明かりに照らされて
青緑色になった木の葉が舞った

「そんなに大きな音をたてると・・・・！！」
ディノスがハッと何かの気配に気付いた
が、既に遅く何か強い力で林の方へ引っ張られ
闇に消えた・・・

「ディノス！！！！」
ウィルはディノスが引っ張っていかれた方を見て叫んだ

「おぃおぃ、よそ見しているとあっさり死ぬぞ」
後ろから殺気を感じ、とっさに左に避けた
シュッと目の前で音がした

ウィルは顔を上げて相手の顔を見た
襲ってきたのは、身長１８０ｃｍぐらいの男だった
獣に近い目、魔族なのは間違いない

「あとは、貴様が魔王かどうか・・・」
そう言ってウィルは左手に剣を構えた

―◇―

「いたた・・・・」
ディノスは体を起こした
所々に擦り傷ができている

気配がした
黒くて静かな気配

ディノスが気配のした方を向くと
銀の髪に金色の瞳をした男が立っていた
何やら魔法を詠唱しているみたいだ

「なるほど、銀色の髪に金色の瞳・・・
　って事は君が今回の魔王か」
ディノスはやけに落ち着いている

銀の髪の男から光が走った！！

辺り一面に炎が舞い
地面が無く
空中にフワフワ浮いているような感覚が襲ってきた

男の姿は見えなくなった

「幻術か・・・でも残念」
そう言ってディノスは槍を取り出した

ガラスが崩れていくかのように
辺り一面の炎が砕け散り
景色は先ほどの山に戻った

銀の髪の男が驚いた顔でディノスを見ていた

―◇―

『ありえない・・・』
一瞬目の前が真っ白になった

私の放った幻術が一瞬にして破られる
なんて事があるはずが無い！！
魔方陣の上に引き寄せ
効力を増大させていたんだぞ

「残念だけど、僕に魔法の類はきかないよ」
幻術を解いた黒髪の男が微笑んでいる

魔力を打消す目を持っている人種がいる

と言うのをきいた事がある
ただ、それらの人種は目が異質を放っていたはずだ

しかし、目の前の黒髪の男は
普通の人間と同じ目をしている

「でも、禁術を使えるだけあるね
　中々の幻術だったよ」
「ウィルの代わりに捕まって正解だった～」
黒髪の男が少し肩を落とした

そうだ
私は金髪の男の方を狙っていた・・・
この男はそれに気付いていた

「いつから気付いていた」
私はつい口に出してしまった

「この山に入ってきてからすぐね、
　ウィルは気配とか読むの苦手だから気付いていなかっただろうけど」
黒髪の男は淡々とした口調で語っている

初めからわかっていただと
気配を読むのが得意とかそんなレベルじゃない・・・

「さて、偽魔王さん諦めて降伏しない？
　魔法は僕には通用しないし」
黒髪の男がそういって微笑んでいる
私が魔王でないこともばれている？

いやはったりだ

「断る！！」
私はそう言って
禁術の一つ『ｆｉｖｅ　ｓｅｎｓｅｓ　ｈｏｌｄ』の詠唱を始めた
相手との距離はある
接近される前に詠唱が終る自信はあった

「ねぇ、五感を徐々に奪われる苦しみってあじわった事ある？？」
黒髪の男が何か言っている
詠唱を辞める訳にはいかないし無視だ・・・無視

「無いよね・・・あったらそんな禁術なんて使わないだろうし・・・」
黒髪の男が溜息混じりにそういった
後１０秒ほどで詠唱が終る

「あじわってみる？」
黒髪の男がそういって・・・いや黒髪じゃな！！！
『ｆｉｖｅ　ｓｅｎｓｅｓ　ｈｏｌｄ』

一気に目の前が真っ暗になった
耳も聞こえない
感覚が麻痺してきた

之が禁術の力
でも、この術は1日に一つの感覚が無くなっていくはずなのに
だめだ、意識がとおのいて・・・

急に目の前が明るくって

感覚が戻ってきた
私はうつ伏せに倒れていた
背中に何かあったっている
顔を上げるとやはり黒髪の男が立っていた
背中に当たっているのは槍の柄みたいだ
「わかった？五感を奪われる苦しみ」
私は何も答えなかった・・・
恐怖で何も答えられなかった
「ウィルの方が心配だな・・・御免少し気絶してて」
その言葉を聴いたあと、私の意識は途切ていた
―◇―
「ちっ、偽者か・・・」
ウィルは相手の顔を見るなり悪態をついた
魔族なのは間違いないが
髪の色と目の色が魔王のそれとは全く違う
「さっさと終らせるぞ」
そう言ってウィル魔族の方へ走り
一閃
雑草が斬れ舞った
魔族は其処にいなかった

「いい速さだ、すばらしい」
ウィルは声をした方向を見た
魔族は木の上にいた

ウィルは何も言わずに
魔族の上っている木に向って
剣を振るった

鈍い手ごたえがした
木の幹は斧で切ったかのように
深くまで斬れていた

「まじかよ！！」
魔族は傾きだした木から
ウィルへ跳び掛かった

「正面からくるとは、馬鹿か」
ウィルは迎撃の態勢をとった

魔族は空を蹴り
ウィルの右側に回りこんだ

「な・・・空中で」
ウィルは後方へ跳んだ
しかし、右肩に相手の爪が少し食い込んだ

「くそ・・・油断した」
ウィルがそう言って
体制を立て直そうとした

いきなり
目の前が暗くなった・・・

―◇―

禁呪の効果を凝縮した毒

即効性で
初めに視力奪う

次に聴力

痛覚はそのままで
相手は苦痛の叫び声や上げる事や
助けを懇願する事しかできない

一方的に甚振れる快感
今回の金髪のようにすかした野郎の場合だと特にな

ゆっくりと金髪の男に近づいた

ヒュッと風を切る音がした
右の頬に熱を感じる

後ろの木からの軽い音
木を見るとナイフが刺さっていた

頬を撫でると生暖かいものが
血だ

「このやろう、足音だけでこっちの位置を！！」

その場から飛びのく

しかし、着地すると同時にナイフが飛んでくる
1本・2本

回避行動をとったが
右足と右肩に刺さった
思わず足が崩れる

追い討ちが来ると覚悟したが・・・
こない

金髪の男を見てみると
不思議そうにあたりを見回している

どうやら、聴力を失ったらしい
「はっ、驚かせやがって」

そう言って
金髪の男の方へ近づく

「ウィル！！大丈夫か！！」
声が聞こえる
パウロが捕まえた黒髪の男が走ってくる

「やつめ、しくじりやがったか」

―◇―

闇、闇、闇
真っ暗な闇何も見えない

静、静、静
静まり返って何も聞こえない

先ほどまでは
見えはしなかったが
音が聞こえた

音の方に
ナイフを投げれば
奴に当るはずだ

しかし
もう音も聞こえない

・・・集中しろ

まだ手は動く
奴が近づいてきて
俺に触れるのを待つんだ

間・・・
１秒が数分間に思えた

肩に何かが触れた
ウィルは恐ろしい反応速度で

触れた者がいた方向を払った
金属どうしが重なり合う音がした
防がれた！！
だが、相手の方向は解った
追撃する・・・
剣が空を斬る
「くそっ、何処だ！！」
焦っては駄目だ
再び集中する
凄い眠気が襲ってくる
「こんなときに・・・」
ウィルは眠ってしまった
―◇―
ウィルの肩を叩いた瞬間
凄い速さで剣を振ってきた
とっさに槍で防いだけれど
どういうことだ？？
「ウィル、どうした？」

声をかけても反応が無い
「くそっ、何処だ！！」
まさか
目が見えていない！！
声をかけても反応が無いって事は耳も

ディノスはある程度
ウィルと距離を置き
薄ら笑いを浮かべている魔族のほうを睨み付けた

そして、怒り交じりの落ち着いた口調で話しだした
「知ってる？魔王は満月の夜にでるんだよ」
一瞬にして場の雰囲気が変わった

風が急に強くなった
草木が凄い勢いで揺れている

其処に
のほほんとした黒髪の男はいなかった

銀色の髪に金色の瞳
魔王・ディノ・ヴェルンが立っていた

―◇―

「魔王か・・・いや、そんな事あるはずがねぇ！！」

銀の髪の男が長髪の男に

何やら魔法をかけている
長髪の男はガクンと魔王の方へ倒れていった
仲間割れか？

「ウィルには悪いけど、少し眠らせてもらった」
銀の髪の男が長髪の男を
少し離れた場所に寝かすとそう言った

「さて、偽魔王チームの退治といきますか」
銀の髪の男がこちらへ歩いてくる
凄い威圧感・・・こんな事は初めてだ

まてよ、こっちには毒があるんだ
いかに魔王もどきと言えど
爪をかすらせる事ができれば

一気に距離を詰める
右爪で一閃
・・・手ごたえあり

銀の髪の男は
素手で爪を止めていた
血が滴り落ちている

「ははは っ、やったぞ」
やった、毒がすぐに回る、此方の勝ちだ

銀の髪の男はクスリと笑った
「この程度の毒が俺に効くと思っているのか」

銀の髪の男からまばゆい光
しまった魔法か、詠唱無しで・・・
薄れ行く意識の中、魔王の言葉を聞いた
「おやすみ・・・・」

―◇―

眠らせた偽魔王組みの、二人を縛り付ける
そして、転送符を使って協会に送る
ウィルがお尋ね者を捕まえるハンターをしている為
この手の道具は沢山ある

ウィルを担いで山から下りる
村に戻るとおばあさんが立っていた

「子供たちはあなた達を待っているって
言って意気込んでおったが、今は眠っておる」
混沌とした目でディノを見つめる
まだ、魔王の状態のままだ

「やはり、あなたは魔王様じゃったか・・・」

「はい、やはりと言う事は検討がついていましたか
それより、早く他の住人の呪いを解かないと」
お婆さんの目を見て納得する
なるほどあの目の持ち主か

「ほっほっほ、そうじゃの、ついて来なさい」
そういって、大きな部屋に案内された

其処には、多くの人が呻き声をあげ苦しんでいた
改めて、あの二人組みに怒りを覚えた

「こういった魔法は専門外だけれど」
ディノはそう言って、詠唱を始める
部屋全体が蒼白く光り
壁一面に魔方陣が広がる

まばゆい光が人々を包んでゆく

「なんだ、何が起きたんだ」
若い青年が立ち上がり
驚いている

「やったぞ治ったんだ！！やっとあの苦しみから解放された」
呪いが解けた人たちが喜びの声を上げている

「この若い黒髪の青年が解呪の魔法を使ってくれたんじゃよ」
お婆さんが態々そう言ってくれた
・・・言わなくても良かったのに、恥ずかしい

「そうなんですか、ありがとうございます」
人の波が押し寄せてくる
こういうのは苦手だ

「すまんが、話があるのでこの若い男は借りるぞ」
お婆さんがちょっと奥の部屋に来てくれと手招いている

兎に角、この場から離れたかったのもあり
ディノスはなんだろうと思いながらも、部屋に入って行った

奥の部屋に入ると
お婆さんが机の向かいに座っていた
もう一つの椅子に座るよう薦められたので
薦められるまま、椅子に座った

「連れのお兄さんは大丈夫かな？」

「はい、解毒もしましたし、今は子供たちと同じ部屋で寝ていますよ」

「いや、つれて来なくてもじゃが・・・」
お婆さんは心配そうに尋ねた

「できれば、こう言った話はウィルに聞かせたくないので」
口調が重くなり
目を下に落とした

「やはり、魔王であることも魔族であることも伏せたまま旅をしておるのか」
お婆さんは悟ったように聞いた

「はい」

「ワシが聞ききたかったのは、故魔王様直々に、旅をしておるのかじゃ」
混沌とした目でこっちを見ている
全てを見透かすような瞳、少し懐かしい

「ある人との約束です、凄く大切な・・・」

凄く遠い記憶だった
でも、凄く大切な記憶でもあった

「そうか・・・」
納得したように、お婆さんはうなずいた

「他に何か、聞かないんですか？」

「いや、聞きたい事は大抵理解できた
なるほど、姉が行っていた通りの人物じゃの」
ふむふむとお婆さんは相槌を打っている

「姉・・・？」

「ほっほっほ気にするな」
お婆さんは笑っている

「折角この辺りまで来たのなら、北の方にある魔法使いが住んでいる村を訪ねてみないね？」

「何故です？」

「お主の母親の生まれ故郷じゃぞ」

「そうだったんですか！！母の・・・
そうですね行って見ます」
母の生まれ故郷
話には聞いたことがあるけれど、この近くだったなんて

「ワシからは以上じゃの、すまんのつまらない話を聴いて」

「いえ、良いですよ」
そう言って、ディノスは部屋から出た

―◇―

次の日の朝
村の人たちから感謝の言葉をうけて村から出た

一応村の人に頼んで
呪いを解いたのは他の旅の魔法使いって事にしてもらった

「すまん、今回は何もできなかった」
ウィルが少しだけ申し訳なさそうに言った

「いいよ、今回戦ったやつ等とはウィルは相性悪かったから」
対魔法使い・対呪いとなるとウィルの能力は半減してしまう
そもそも夜って言うのもまずかったが

「でも、納得がいかん！！また外れだったなんて」
ウィルが怒っている

「魔王が行方不明になって、魔王を名乗る輩が増えたからしょうがないよ」
之は本当の話だ、各地で魔王を名乗る魔族が出没して大変な事になっている
魔王って名乗って何が楽しんだか

「そうそう、僕、今度行きたい村があるんだ」

「何処だ？」

「魔法使いが集まってる村、ウィドタウン」

「魔王についての情報も今はないし・・・いいよ」
少し、以外だったウィルがＯＫをだすとは
矢張り、昨晩の事をまだ引きずっているのか

「それじゃあ、行こうか」
進路を北に行く道にとる

母の生まれ故郷がどんな場所か、
わくわくしながらディノスは歩いていく
そこで、母親についての驚く話を聴くことになるとは
その時は、知る由も無かった次の日の朝
村の人たちから感謝の言葉をうけて村から出た

孤独の中の魔法使い（前編）

薄暗い森の中
獣道を歩いていく男が二人

「ディノス、道はあっているのか、さっきから草が凄いぞ・・・」
長い金色の髪をした青年が
黒髪の青年を睨み付けている

「うーん、地図ではあっている筈なんだけれど」
と言いながら地図を見ている

「・・・ずっと気になっていたんだが」
金髪の青年が少しイライラしている

「その地図っていつの時代のだ？」

「えっと、３０年前のかな」
ディノスがそういい終わると
同時にディノスに向って鉄拳が飛ぶ
２〜３メートルほど転がっていった

「いたた、ウィルいきなり何を？」
ディノスが起き上がる
服に草がついている

「３０年前の地図があてになるか！！」
ウィルが叫んだ

ゴウッ
風を切る音
林の間から聞こえてくる
凄いスピードで何かがこっちに来る
「きゃー、どいてどいて！！」

ドンっ
不意をつかれたのでかわす事が出来なかったのか
ウィルは遠くに飛ばされてしまった

「えっと、ごめんなさい」
ウィルにぶつかった少女が謝って来た
ツインテールの髪に、翡翠色の目をしている
黒いローブを着て、箒を持っている
典型的な魔法使いの格好だ

「あ～、謝るんだったらウィルに謝ってあげて・・・ってウィルは何処だ？？」
辺りを見回す、見つからない

「おい、こっちだ」
上の方からウィルの声がする
木の上を見上げると
ウィルの服が木の枝に引っかかっていた
ある意味お見事

どうやっておろそうか・・・

「私が行きます、ウィルさんにはぶつかってしまった責任がありま

すから」
そういって彼女は箒にまたがり
ウィルの引っかかっている場所へ飛んで行った
物凄いスピードで・・・

ドンっ
再び鈍い音
また、彼女とウィルがぶつかった

運良く（？）
二人は草が沢山生えている所に落っこちていった
恐らく、草が良いクッションになっている事だろう

二人が落ちて言った場所に行って見ると
やはり、彼女が一生懸命謝っている
が、ウィルは気を失っているのか反応が無い

「おい、ウィル起きろ」
トントンっと肩を叩く

う～んとうなって
ウィルが起きた

「あれ？一体何が起きたんだ？？」
いまいち、状況がつかめないらしい

「木に引っかかっていたところを彼女が助けてくれたんだよ」
ぶつかったのが何かまでは気付いて無いらしい

「いて・・・」
木にぶつかった事と
落ちた衝撃で、腕や背中から血が出ている

「ごめんなさい・・・
傷を見せてもらって良いですか？」
彼女はそういってウィルに近づくと
詠唱を始めた・・・

暖かい光がウィルを包み
ウィルの怪我が回復していく
ウィルはただ驚いて見ているだけだった

「私、治癒魔法は得意だから」
彼女が優しく微笑んだ

「あ・・・ありがとう」
ウィルが照れくさそうに礼を言った

「珍しいね、治癒魔法が得意な魔法使いって」
ディノスが物珍しそうに聞いた

女の子が傷ついてしまったのか
しゅんとして下を向いてしまった

「私、それしかとり得が無いから・・・」
消え入りそうな声で言った

「ごめん、治癒魔法が使えるって凄いなって思ってつい・・・」
ディノスもしゅんとしてしまう

「治癒魔法を実際のものを見るのは初めてだが、使える事はそんなに凄いのか？」
ウィルが不思議そうに二人を見ている

「凄いし珍しいね、大体の魔法使いの人たちは、
破壊系統の魔法を覚えがちだし、そっちの方の素質が強いから」
「そのうえ、元々治癒系の力に特化している人自体が少ないからね、それだけで凄い才能なんだ」
ディノスがそう話してくれた

「確かに、私にそう言ってくれた人がいた」
女の子は少し元気になったのか顔を上げた

「でも、皆いなくなった・・・」
急に女の子が泣き出した

「落ち着いて、なにがあったか話してくれる？」
ディノスが優しく語りかけた

「はい、私の住んでいる村では毎年１６歳になったらチームを組んで、
森の中にある祠の中で試練を受けることになっているんです」
彼女は少し落ち着いてきたようだ

「今年も例年の用に行っていたんですが、祠に行った人達が帰ってこなかったんです・・・」

「それは、試練で何か問題が起きたのかな？」

「わからないです、それを調べに行った大人たちも同じように帰ってこなくて・・・」
「気がついたら村には誰もいなくなってて・・・」
女の子は目に涙を溜めている

「・・・うん、その祠は何処にあるの？」
ディノスが場所を聞いた

「この森の奥の方です・・・」
そう言って、女の子は森の奥を指した

「はぁ、僕らは君の村に予定があったのに・・・人はいないか」
「その祠僕らが行っても大丈夫？」
ディノスが女の子にたずねる

「はい、来て頂いた方が助かります、祠の試練は3人以上いないと受けれませんので」

「3人とは、また都合が良いな」
ウィルが不思議そうにしている

「紹介がまだだったね、僕はディノスよろしく」
「俺はウィルだ」

女の子が少し驚いた様子でこっちを見た
「私はレイです、よろしくお願いします」
レイは泣き顔から、すっかり笑顔に変わっていた

「しかし、何故3人以上なんだ？」
ウィルが不思議そうに訊ねる

「私も知らないの
今年は3人以上ってだけで
試練の内容は伏せられているし
役に立てなくて御免なさい」
レイはしゅんとしてしまった

「其処まで気に病まなくても、
まぁ、行って見たらわかるか・・・」

森を抜けると怪しげな祠が建っていた

「急遽拵えたような作りだな」
ウィルは一見するなりそう言った

「でも、魔力は感じるよ結構強い」
ディノスは気を引き締めている

「祠なんて、ただの飾りですから
大事なのは、祠にある水晶玉です
あれに触れると試練の間に飛ばされます」

皆で祠に近づく

レイがジーと祠を見ている

「でも、聞いていたのと少し違うような」
レイが首を傾げる

「とりあえず、試練の間まで行って見よう」

三人で水晶玉に触れる
眩い光が一面に広がった
光がゆっくりと静まっていく
3人は白い壁に囲まれた広間に立っていた
壁の上側から声が聴こえてくる
「ようこそ、魔法使いの皆さん
今回は3人ですね」
「俺らはま・・・」
ウィルが魔法使いじゃないと言おうとするのを
ディノスが静止した
「どうも、今年の試練は何ですか？
試験監さん？」
ディノスは声の方を向き一礼した
「試練はいたって簡単
目の前に扉が3つありますから
1人ずつに分かれて
それぞれの扉に入ってください
そこでは、部屋毎に試練が設定されていますので
それを全員が攻略すれば、晴れて試練合格！！
となります」
白い壁に木製の扉が3つ浮び上がった

「それでは、皆さん御機嫌よう」
そう言って声は収束していった

「さて、早速いくか・・・」
ウィルが扉に向って歩き出す

「ちょっと待って下さい」
レイがウィルの服をギュッと握る

「どうした？」

「おかしいんです
聞いていた内容と全く違う・・・」
レイが深刻な顔になっている

「聞いていた内容？」
ウィルが聞き返す

「はい
今年の試練は
チームワークを主として作成している
って聞いていたんです
３人が分かれてって
これだと、逆です」
レイの顔が青ざめている

「罠か・・・」
ディノスが目を瞑り
何か考え事をしている

「逆だとしたら
罠だと気付いて
逃げ出してる奴もいるだろうに」
ウィルが不満顔をしている

「それは、無理そうだ」
ディノスが溜息と共に目を開けた

「初めは
幻術の系統かと思っていたけど
此処は実際に存在している場所で
僕達は水晶玉の力で
此処まで飛ばされてきたみたいだ
魔力を打消しても意味が無かった
そして、ルートは目の前の扉しかない」

「だったら、もう捕まってしまったて事ですか？」
レイが泣きそうな顔になっている

「気になるのが
何故3手に分かれさせるのか・・・」
ディノスが困った顔をしながら頭を掻いている

「丁度良い、俺達を此処に呼んだことを後悔させてやろう」
ウィルが俄然ヤル気になっている

「二人ともちょっといいか？」
ディノスが手招きをしている

「何でしょうか？」

「何だ？」
二人がディノスに近寄る

「あからさまな罠って言うのは
作った本人が大して意識していないのか
罠自体をフェイクにしもう一つの罠をはっているか
絶対に引掛ける自身があるか・・・なんだ」

「幾つか事態を想定して
その対処法も考えたから
その方法と必要な物を渡すよ」
ディノスはウィル達に対処法と幾つかの物を渡した

「さて、何が出てくることやら」

「虎穴にいらずんば虎子を獲ず・・・か」

「皆さん、また後で会いましょうね」

3人がそれぞれの扉に入っていった

―◇―

ウィルが入っていた部屋の中は
また真っ白な壁で囲まれていた
部屋の奥にはまた木でできた扉

「ようこそ、試練の間へ」
上空から声がする

「この部屋試練は、いたってシンプル」
「無事に奥の扉へ行く、ただそれだけです」
「では、ご武運を・・・」
声が遠くなっていく

バタッ

一瞬で白塗りの壁に穴があいた
穴からは銀色の矢が覗いている

石を取り出して
前方に投げる

ヒュッ
風を切る音と共に
石が落ちた場所に複数本の矢が刺さった

床を良く見ると
扉までマスで碁盤目状に区切られていた

「間違った場所を踏むと、矢が飛んでくるって寸法か」

レイの用に空を飛べるのならば簡単にこなせそうだ
残念ながら
空も飛べないし
どのマスが正解かもわからない

ただ、一つ解っている事は
矢の飛んでくる速度が
剣を振る速度よりも遅いって事だけだ

「めんどうだし、さっさと終らせるか」

扉に向って走り出す
石を投げた時とは
比べ物にならない数の矢がウィルを狙っていた

「心眼流　一の型　『風陣』」
左手に剣を構え一回転する
風が巻き起こり
矢は上空に進路を変えた

難なく
扉の前に着く

ガタン

大きな音がして
床が凹む
迂闊にも足を捕られてしまった

「最後の罠か！！」

銀の矢が
全ての穴から飛んで来た

―◇―

ディノスが入った部屋は
前に入っていた部屋と違い真っ暗だった

「何も見えないな・・・」
ふぅ・・・
と溜息をつく
眼前に見えるものは闇ばかり
何をしていい物か・・・

闇の中からひっそりとした声が聴こえてくる

「ようこそ、試練の間へ」

「この部屋試練は、いたってシンプル」
「闇の中にある扉を探しだす、ただそれだけです」
「では、ご武運を・・・」
声が闇の中へ消えていった

「シンプル・・・ねぇ」
確かに怪しさだけは単純だ
明かりを点けられる魔法があれば簡単なのだが

カサカサッ
物音がする

音をたてずに音のした方に行く
何やら小さいもの
動いているように感じる

スゥッと水をすくう様に其れを持った
暗い上に
すくったモノも黒くてよく見えない

黒い
虫の様な形
金属のような独特の光沢
尻尾らしき場所に鋭い針
掌でカサカサ動いている

『アウァオリ』
と呼ばれる虫だ
確か図鑑で見たことがある
尻尾には猛毒には像もイチコロな程の毒があるとか

「危ない！！」
咄嗟に投げ捨てる

カサカサッ
音は辺り一面中にしている

暗黒は虫の姿を消し去っている
・・・これは早く扉を見つけないとまずいな

―◇―

レイが入った部屋は塔の様になっていた
円柱状の建物に
螺旋状の階段

天井ははるか遠くに見えている

「ようこそ、試練の間へ」

「この部屋試練は、いたってシンプル」
「塔の最上階にある扉を目指す、ただそれだけです」
「では、ご武運を・・・」
声が闇の中へ消えていった

階段を態々上らなくてもいいよね
箒を手に取る

箒に重力制御の魔法をかけ
空を飛ぶ

この魔法の魔力の制御は苦手
いつも、凄い速さになってしまう

最上階に着くのに1分とかからなかった
魔法を解き最上階の扉の前に下りる

「案外あっけなかった・・・」
少し気が抜けた
ウィルとディノスはもう着いてるかな？

扉を開ける

開けた扉の先にの部屋は
ガランとしていた

スゥッと影から男が現れた

「ウィル？それとも、ディノス？？」

どっちでもなかった
何故なら、男は見知らぬ仮面を被っていたから

「ふむ、あなたで最後ですね」

見知らぬ男はそう言って
コツッコツッと
足音を立てながら
ゆっくりこっちに歩いてきた

最後？何を言っているのかしら？？
ウィルとディノスが先に試練終ったのかな

「ウィルとディノスは何処？」

「貴方の他に、入ってきた異分子の二人ですか・・・」

「今頃、遠い空にの向うにでも行っているんじゃないですか」
仮面の男が笑っている様に見えた

空の向う・・・？
まさか死！！
「試練は失敗する事はあっても
死人が出ることは無いはずだよ」

「この試練は、私があなた方魔法使いを
捕らえるために作成したフェイクです」

「それに、異分子は抹殺する様に作成しております」

男との距離が段々近づいてくる
「こないで、それ以上近づくと！！」
杖を男に向ける
攻撃系統の魔法は苦手だけど
足止め程度にはなるだろう
あの二人が死んだなんて絶対に信じない
時間さえ稼げば
「近づくとなんですか？？」
スゥッと音も立てずに男が近づいてきた
一気に距離が縮まった
魔法を詠唱する暇さえなかった
ダメだどうし様も無い・・・
「痛っ、しくじった」
部屋の奥から金髪の男が姿を現した
ウィルだ！！
ウィルは肩や足から血を流している
「ウィル、大丈夫か？？」
ディノスの声もする
やっぱり
二人共無事だったんだ
嬉しくて、泣きそうになった
「バカな！！何故無事此処にいる！！！」

仮面の男が急に声を荒げた

「あんなチンケな罠で
仕留められると思うな」
ウィルは左手に剣を構え臨戦態勢をとっている

「企業秘密って事で」
ディノスも右手に黒い槍を構えている

「きさまは何者だ
敵であるなら問答無用で叩き切るが」

「何者と申されましてもねぇ
とりあえずは敵・・・になりますね」
クククッと仮面の男が笑っている

「それに、私達の目標は
もう達成される
あの村の最後の一人を捕まえたのだから」
仮面の男がレイの腕を掴む

「ちょっと、離してください」
レイがジタバタと暴れる

「だとしても、逃げ道は無いよ」
ディノスが既に仮面の男の後ろに回り込んでいる

「逃げ道・・・用意しているに決まっているじゃないですか」
仮面の男に向って突いた槍が空を切る

「ディノス上だ！！」
ウィルが叫ぶ

上空に仮面の男とレイが浮いていた

「私の仕掛けた罠を通過して来た事には敬意を評しますよ」
「2度と会うことは無いでしょうけれど」
フッと立ち上った煙の様に
仮面の男とレイが消えていった

それは
想定していたなかでも可能性の高かった結果だった

「予想通り、テレポート系統の魔法が使えたか」
水晶に転送の魔法をかける程の腕前だ
其れ位の事は朝飯前だろう

「しかし、ディノスらしくも無い作戦を立てたな」
ウィルが頭を掻いている

「仕方が無いよ、他に良い手が思いつかなかったから」
ディノスが溜息をつく
やはり、本心ではやりたくなかったに違いない

扉に入る前に3人で話した作戦の中の一つ

レイを囮にして
魔法使いを捕らえている本拠地を暴き
其処を叩く

「レイは『任せてください！！』って言っていたけれど」
ディノスの溜息がどんどん深くなる

「落ち込んでる場合か！！早く行くぞ！！」
ウィルが左手に透き通った琥珀色の石を取り出した
転移石だ

転移石は簡単なテレポート系の魔法を封じ込めた石で
種類によっては
同系統の石を持った者の居場所に転移できる

もちろん、レイにも渡してある
「そうだね、急ごう！！」
転移石から眩い光が発生し
ディノスとウィルを包んだ

収束されていく光の先
ディノスとウィルは外に出ていた

「ここは、何処だ？？」
ウィルが辺りを見回している

「ディノスまさか失敗したんじゃ無いだろうな！！」
ウィルがディノスを睨み付けている

「うーん、失敗って訳じゃないよ
目の前にあるあの怪しい城っぽいもの
あれがレイ達が捕らえられている場所だよ」
ディノスが城に近づく

「何故そんなことが解るんだ??」
ディノスが城の入り口に手を掲げる
バチッ
青白い閃光が奔った
ディノスの手が弾かれる
「いたた、やっぱり結界が張ってあるか
これのせいで中には入れなかったみたい」
「まぁ、この程度のモノは
結界と言っても所詮魔力の塊」
ディノスが槍を構えた
「魔力を無効化するこの槍には無意味」
結界の張ってある場所を突く
一瞬で結界は解けた
「相変わらず反則だな、その槍は」
ウィルは感嘆している
早速二人で城に入っていった
城の中に入ると
早速上下へ続く階段があった
「とりあえず、二手に分かれようか」
ディノスがそう提案した

「そうだな、じゃあ俺は上の階に行く」
そうだけ言い残して、ウィルが階段を上っていった

「罠には気をつけろよ～」
階段に向って叫んだが
ウィルに届いているかどうか・・・

―◇―

青白いレンガに囲まれた壁
鉄格子
硬いベッド

レイは牢屋の様な場所に一人捕らえられていた

少しだけほっとしていた
町の他の人たちと一緒にならなかったから

孤独を感じるのならば
一人で牢屋に居る方がまだ耐えられるから

それに
ウィルやディノスが助けに来てくれる

でも、待っているだけじゃいや
ウィル達の手助けがしたい
ウィル達が来る前に私ができる事が無いかしら

・・・考える

まずは此処から出ないと始まらない
鉄格子には勿論、鍵が掛かっている
「鉄って事は、高温で熔けるよね
熱を発生させる事ができる魔法・・・」
不安だった
元々、攻撃系統の魔法は苦手
魔力を制御するための杖が無い
この状態で魔法が使えるのか
でも、やって見るしかない
詠唱を始める
空中を舞っている波に
魔力を乗せるイメージで
『バーンブラスト』
・・・・不発
本来ならば鉄格子に火柱が上がって
鉄格子が熔ける予定だったのに
「やっぱり、私じゃ無理なのかな・・・」
溜息をついてベットに横になる
「レイ、ここにいたのか」
聞いた事のある声
ベットから起きる

「そのまま、その場所にいた方がいい
今から、鉄格子を切るから危ないぞ」

ヒュン
と風を切る音がした

ガラガラ
と鉄が崩れ落ちる音がした

鉄屑になった鉄格子の向こう側に
ウィルがいた

「ウィル来てくれたんだ」

「仲間だろう、当たり前だ」
ウィルは少し照れくさそうにしている

「仲間・・・」
凄く嬉しい響だった

「ディノスはどうしたの？」
ウィルは居るけれど
ディノスが居ない？

「今は二手に分かれてて、
ディノスは下の階に行っている」

「私達も下の階へ？」

「いや、まだこの階を調べつくしていないから
この階の探索が先だな」

急だった
転移石を使った時の様に
眩い光が二人を包んだ

光が収束し
二人が移動した場所は
白いドーム型の広場の中だった

「何だ此処は??」
ウィルが辺りを見回している

周りは壁で囲まれていて
天井にはお皿のようなモノがくっ付いている
壁の上の方にガラス張りの部屋が見える

其処には人が2〜3人いた
なにか、話しているように見えるけど
流石に内容まではわからない

―◇―

「二人いる?聞いた話だと一人のはずじゃ」
白衣を着た男がガラス越しにドームの中を見ている

「気にすることは無いんじゃないか、
多いにこした事は無いんだから」
眼鏡をかけた男が白衣の男に話かける

「そうだな、それに今日はこれでお仕舞いだし
さっさと終らせるか」
魔力収集装置のスイッチを押す

ドームの天井にあるアンテナから
ドーム内にいる生き物の魔力を吸い取る装置だ

それを使い毎日
魔法使い達の魔力を集めている

何故
集めているのかは解らないが
上からの命令だし仕方が無い

こうしないと
我々の研究費も貰えない

ドォン・・・
凄い音と共に凄い揺れ

「どうした！！」

「ブロックEで爆発！！魔力収集装置のシステムがダウンしました
！！」

ブロックE・・・
さっきまで
転送されてきた二人がいた場所だ
しかし、何故？？

「早く、予備に切り替えろ！！」

ガシャン
窓から
下に居た二人が入ってきた

―◇―

ドン

「ガッ・・・」

みね打ちで部屋に居た白衣の男を気絶させる

「ありがとうレイ、助かった」

しかし、危なかった
あの部屋に入って直ぐ
恐ろしい脱力感が襲ってきた

魔力を吸い取られている
とレイが言っていた

魔力が殆ど無い俺は
危うく意識を失うところだった

地響きがして
魔力を吸い取っている装置が止まった

レイが咄嗟に箒を取り出し
俺を引っ張り

ガラス張りの部屋に突っ込んでいった

「いえ、私にはこれ位しかできないですから」
レイが下を向いた
少し頬が紅くなっている様に見える

「さて、此処が何処か答えてもらおう」
もう一人
気絶をさせなかった男に剣先を突き付けた

「予想外だよ、この場所に来るとはね
此処はブローニン研究所の3階で
さっき体験しただろうけど
対象の魔力を抽出している」
男は観念したのか
この場所について話し出した

「そして、あんた達の墓場だ」
男が手から丸い金属を取り出した

金属が爆発し
目の前が真っ白になった
閃光弾だっ！！

視界が戻った時には
目の前の男は消えていた

「う・・・うそでしょ」
レイが震えている
どうしたんだ？

レイの視線の先には
髪を結んだ男が立っていた
となりには逃げた男が

「なんで、レヴァンが此処にいるの！！」

レヴァン？あの容姿・・・
レヴァン・ナインボルトか

レヴァン・ナインボルト
髪の色から
別名『深緑の魔術師』
高名な魔法使いだが
森に囲まれた村にいて
滅多に表に出ることが無いが・・・

森に囲まれた村
面識があるみたいだし
レイのいる村がそうなのか？

でも
レイのあの脅えよう

「レイ・・・大丈夫か？」
レイに近づく

「ウィル！！危ない！！！！」
レヴァンのいる方向から
巨大な火球が飛んでくる
詠唱せずに之だけの魔法を撃てるのか
完全に不意を突かれた
避けきれない！！
レイが前に立つ
「レイ、危ない、何やって」
青白い光が舞った
跳んできていたはずの火球が
跡形も無く消えていた
何が起きたんだ??
「ウィル、大丈夫だった?」
レイがこっちを向く
足はまだ震えている
「あぁ、でも何をしたんだ?」
「魔法に対するシールドの魔法を張ったの
防壁系の魔法は得意だから
杖が無くてもなんとか」
「成る程、

レイはレヴァンと知り合いなのか？」

「はい、唯一、村で優しくしてくれる人でした」

「でも、何で急に襲って来たんだ??」

「わからないです

ただ、見た感じ様子が変なの

あんな表情見た事が無くて

・・・怖いの」

確かにレヴァンの目は据わっている

まるで、意識が無いかのように

・・・洗脳か？

洗脳されていようがいまいが

現時点ではレヴァンが襲ってきているのは事実だ

兎に角

動きを止めないと

迂闊に近づくと

やつの魔法が来る

・・・一か八か!!!

レイに転移石を貰う

「どうするの？」

「之を使って
一気にレヴァンの懐に飛び込む」

「え・・・危ないよ」
レイが心配そうに言った

「だが、このままレイに
シールドを張ってもらっていても
レイに負担がかかるだけだ
魔力も無限では無い」

レヴァンの足元に転移石を投げる

直ぐにもう一つ
転移石を取り出し
使用する

光と共に
ウィルはレヴァンの脇に転移した

「悪いが、気絶してもらう」

剣を振るう
重く鈍い手応えがした

剣の先には緑色の光が収束している
レヴァンが一瞬でシールドを張っていた
しくじった！！

間髪いれず目の前に火球が
咄嗟に後ろに飛んだが
手足に火傷を負ってしまった
魔法を同時に扱えるのは
想定外だった
魔法は制御が難しいらしい
同系列でない魔法を同時に制御するというのは
右手で文字を書きながら
左手で絵を描く様なものだと
ディノスが言っていた
攻守が両立できているとなると
どう攻めるべきか
ディノスがいれば楽なのだが
「ウィル大丈夫！！」
レイが走って来て
回復魔法を唱えてくれた
「すまない・・・」
何か手は無いか
良い手を思いつかない悔しさに
思わず地面を殴った

レイが吃驚していた

「御免、少し気が立ってた」
つい頭を抱えてしまう

急にレイが何かを決意したかの様に
レヴァンの方向を向いた

「私、レヴァンを説得してみます」

―◇―

螺旋状の階段を

下る

降る

階段から下を覗き込む

漆黒の闇が拡がっていて

一向に底が見えない

底が見えない・・・？

階段を削り

削った石を暗闇の中に投げ込む

・・・5秒・・・・10秒

音はしない

「・・・そういう事か」

ディノスは階段から飛び降り

漆黒の闇の中へ消えていった

漆黒の闇のその先

レンガで造られた部屋に

ふわっと着地した

部屋の椅子の上に

仮面の男が腰をかけている

「あの階段の仕掛けに

気付く人間がいるとはな」

すくっと男が立ち上がる

「そもそも

結界を張ってあるこの研究所に

何故入ってこれたのか」

男は含み笑いをしている様に見える

「あの程度の結界なら

楽に破る方法があるからね」

「そうか、其れは実に興味深い」
仮面の男が近寄ってくる

「何故、ウィドタウンの村の魔法使い達を誘拐した」
ディノスが男と距離をとりながら質問した

「答える必要は無いでしょう・・・
貴方も、此処で捕まるのですから
それとも、力ずくで聞いて見ますか」
クックック
と男が笑っている

「魔王からの質問でもか？」

「魔王、証拠はあるのですか？？」

「これでは、不満か？」

ディノスが白を基調としたローブを取り出した
代々魔王を選定する為のモノだ

クックック
仮面の男の笑いがさっきより強くなった

「これは滑稽！！
あの方の言っていたとうりだ！！！
本当に魔王が城を空けているとは！！！」

「それに、私が魔王からの質問だからと言って

答えなければいけないと言う事も無いでしょう」

「それも、そうだね」
過信してしまった
しかし、あの方とは何者だ??
恐らく、指示をしている者だろうが

「まぁ、この場所に気付いた事を賞しまして
少しだけ話しましょうか」

「実際の処、あの方が魔力を集めて何をするかは
私にも分かりません」

「あの方の事ですから
何か面白いことをするのでしょうが」

「あの方とは、一体誰だ??」

「クックックック、其れは言えませんね
言った所で知っているとは思えませんが」

「まぁ、人間・魔族以外の第3勢力が居るとでも思っていて下さい」
第3勢力?
聞いたことが無い人物・・・

「私達は、余り表に出ない様にしていますから
気付いているものは殆ど居ないでしょうね
魔王と出会ったのは少しだけ、運が悪いのか・・・」
仮面の男が扇子をこっちに向けてきた

「それとも、運が良いのか！！！」
紫色の光が柱となって四方を囲む
この方陣は『封魔結界』
魔力を封じるだけではなく
魔力を吸収する方陣だった

「ふふ、魔王を名乗るほどの者の魔力です
さぞ、大量に採取できるのでしょうねぇ・・・」

「っつ！！」
方陣の発動には魔力を必要とするが
方陣自体は魔力でできている物ではない

魔力を無効化するヴェアフルでは意味が無い
一気に奴の懐まで飛び込まないと

右手に持っている槍が形状を変える
非常にシンプルな形に真っ黒い塗装

『ｔｅｎ　ｍａｓｋ　ｏｆ　ｌａｎｃｅ（十の仮面を持つ槍）』
の一つ黒槍
持ち主の体を羽のように軽くなる付加属性を持つ

「な・・・早い」
一気に差を詰める
槍の柄で仮面の男のボディを突く

「ぐ・・」
男の体がくの字に折れる

「普通だったら、
あの方陣で魔力を吸われて動けないはずなのに」
「あの程度の吸収量だと
まぁ、3日はかけないと吸収しきれないだろうね」
「っ化物め」
すかさず
2撃目を仮面に入れる
仮面は薄い音をたてて
真っ二つに砕けた
「！！！！！！っ！！！！」
仮面の男が必死に
割れた仮面を抑え
狂気にも似た叫び声をあげた
「きさま！！仮面を！！！許さんぞ！！！！」
凄い殺気だ
「次にあった時が最後だと思え」
そう言い残して、男は消えて行った
「しまった、逃げられた」
仮面を割られたぐらいで
あっさり退くとは思っていなかった
第3の勢力

あの方
気になる事はあるが
今は捕らわれている人たちを助けるのが先だ

出口は何処だろう??

仮面の男がいた部屋には多くの扉があり
どれが出口に繋がっているのか解らない

「適当に入っていくしかないか・・・!!」
地震と勘違いするほどの凄い揺れ

暫らくした後
少し離れた場所で
強い魔力のぶつかり合い

何が起きている??
しかも片方の人物の魔力は本当にヤバイ

急に
ウィルやレイは大丈夫か心配になった

―◇―

ウィルには大丈夫っていったけど
私なんかにレヴァンを説得できるかしら

でも、まだ信じられない
あのレヴァンが操られているなんて

普段はのほほんとしているけど
凄い魔法使いの筈なのに

連続して来る火球
息をつく間も無いほど
『バースト』の魔法を連発してくる

本来ならば
野球ボール位の大きさの火球が飛ぶ程度の魔法だけど
魔力の高いレヴァンが使うと
その大きさは何十倍にもなる

『シールド』の魔法は殆ど詠唱無しで
張る事ができるけれど
流石にこの数だと隙が無い
常に最高状態にしておかないと破られる

「レヴァン、もうやめて！！」
反応が無い
虚ろな目のままこっちを見ている

魔力を吸収された影響からか
一瞬眩暈がした

「しまった、シールドが」
間に合わない
目を瞑った

爆発音がする

腕の辺りが少し熱い
直撃はしていないみたい

そっと、目を開ける
目の前にはウィルが立っていた

「まったく、危なっかしい
ずっと火球を見ていたから、
ある程度そらす方法は考え付いた、
今度はこっちが盾になるから、
説得に集中しろ」
ウィルが澄ました態度をとった
両手を火傷している
ダメージはそんなに小さくないはずなのに

「でも・・・その両手」

「気にするな、
コツは掴んだ、
次はもっと上手くやる」
ウィルは少し溜息を突いて
優しく言った

「仲間を信じろ」

仲間を信じろ・・・
長い間
孤独に生きてきた私には
凄く嬉しい言葉だった

「ヴェルン
貴方が昔私に言ってくれていた通り
私にも大切な仲間ができたよ
それを貴方に伝えたい
だから、目を覚まして
私の仲間を傷つけないで」

大きな声で叫ぶ

喉が痛む
今までこれだけ大きな声を
だした事が無かった

ウィルは本当に
コツを掴んだみたいで

どうやっているのか
わからないけど
飛んで来る火球を次々と消している

私に火の粉が振りかかって来る事は無かった

火球がピタッと止まる

レヴァンが頭を抱えて苦しんでいた

―◇―

痛っ
頭が重い

見えない力で押さえ込まれているようだ

それに此処は何処だ？

白い壁？
見たことも無い機械？
見覚えの無い人物？
聞き覚えのある声？
全てがぼうっとしていてハッキリしない

頭が回らない
苦しい
思い出さなければ

何をしようとしていたのか
何が起きたのか
何故ここに居るのか

確か今年の試練の準備をしてた筈だ
そして、準備が終った後に
何者かが来たんだ

そいつは、仮面をつけて居たから
顔は解らなかったが

記憶はその人物を見たところで止まっている
気絶でもさせられたのか？

遠く・・・はるか遠くから声が聞こえる
さっきから聴こえている聞き覚えの気がするある声

ただ、遠くにぼんやりと聞こえてくる
いや、おそらく近くにいるんだろう
ただ、意識が朦朧として幻聴の如く響いている
少し、視界が鮮明になる
翡翠色の髪をした少女が目の前で涙を流している
「レヴァンしっかりして！！」
―◇―
「レイ・・・か？」
「よかった、ヴェルンが正気に戻った」
レイはぎゅっと
ヴェルンを抱きしめた
「正気に？私は何をしていたんだ？？」
ヴェルンは頭をおさえている
「俺の両手をこんがりと焼いてくれたよ」
ウィルが研究員を縛り上げている
両手は火傷して少し紫がかっている
「そうだった、急いで治療しないと」
レイはサッとヴェルンから離れて
ウィルの方へ走っていった
「君は誰だ？

見かけない顔だが
それに此処は？」

「少し待ってて
ウィルの手を治療してから
色々話すことがあるから」

レイはウィルの手に回復魔法をかけ
その後、レヴァンに
村の人達が誘拐された事
ウィル達に協力をしてもらって助けに来た事
レヴァンが洗脳されていた事を話した

「そうか・・・」
レヴァンはそうとだけ言って
目を瞑った

「後は、こいつを締め上げて
捕えられている人たちの居場所を聞くだけか」
ウィルが研究員を睨み付けた

「ハッ、それ位自分で探せ」
研究員が嘲笑する

「ほほう、貴様は立場と言うものがわかっていないようだな」
ウィルが指を鳴らしている
背後には仁王像の様な物が見える気がする

「ウィル、暴力はダメだよ
それに、無理に聞かなくても大丈夫よ」

レイがウィルをなだめている

「おそらく此処から３００メート程ル離れた場所
幾つもある部屋の中に６，７人ずつ捕えられていますね」
レヴァンが目を開き、研究員を見る
研究員の顔から冷や汗が滴り落ちた

「後、誰かこちらに向って来てますね
先ほど話しで聞いたディノスって方でしょうが・・・」
レヴァンはそこで話す事をやめた
口に手をあてて
真剣な表情をしている

「レヴァンどうしたの？まだ頭が痛いとか？？」
レイが心配そうに見つめる

「いえ、大丈夫です・・・」
ディノスの気配に
少し、ほんの微量な程度に
懐かしい気配が混じっている気がした

―◇―

「ウィル、レイ無事か！！」
部屋の中にウィルとレイの影がチラッと見えた
よりによって
強い魔力のぶつかり合いがあった部屋だった
部屋に入るなりそう叫んでいた

「助けに来たんだとしたら・・・遅い」

ウィルがディノスのいる方向を向いて
軽い溜息をつく

「これでも、急いで来たんだけど」
ディノスが肩を落す

「でも、丁度良かったね
ディノスと合流できたから」

「・・・後は村の皆を助けるだけかな？」
レイが少し間を開けて言った
目は遠くを見ている気がした

その様子を見ていたウィルが
言うべきかを少し悩んでレイに聞いた
「レイ、もしかして村の人たちと会うのが嫌なのか？」

「いえ、特にそんな事はないですよ」
レイはギクリとして
一瞬思考が止まった
必死に頭を巡らせて出てきた否定の言葉はそれだけだった

何かを感じ取ったのか
ウィルもその話題には触れない様に話を変えた

「ディノス、下の階には何があった？」

「村の人たちを捕えていた、
仮面の男がいたよ
残念ながら逃げられたけれど」

「すっかり存在を忘れてた・・・
ディノスがとり逃すのは珍しいな」

ディノスは地下の階のやり取り
（魔王とばれそうな部分を除く）
をウィル達に話した

「第３の勢力・・・確かに気になりますね」
後ろに深緑の髪をした男が立っていた
気配も立てずに其処に居たので
かなり驚いた

「吃驚した
その髪の色に
強い魔力
もしかして、
レヴァン・ナインボルトさんですか？」

「ふむ、
私を知っているようだね珍しい」

「・・・珍しいって
別名がつくほどの魔法使いを
知らない方が珍しい気がしますが」

レヴァンはディノスの顔をじっと見て
ふむ、とだけ言った

「色々と気にはなりますが

今は村の人を救出するのが先決ですね
ディノスさんのお陰で
今、この建物で動き回れるのは
私達だけみたいですし
早く行きますか」

「驚きました
何も言っていないのに警備員や研究員を
気絶させている事に気付くとは」
ディノスが頭を抱える

「無駄に、魔力や気配の探知は得意ですからね」
レヴァンが軽く笑った

「そうだ、祠の入り口までなら、
魔法で転送できますから
レイとウィル君は先に村に戻っててください」

「えっ、でも」
レイが心配そうにレヴァンを見つめる

「心配しなくても大丈夫ですよ
こっちはディノスさんと二人で十分です
なので、帰ってお客さんの泊まる場所の準備をしておいてください
私の家でいいので
では、ウィル君道中のボディーガードは頼みましたよ」
そう言って二人に転送魔法をかけた

青白い光が舞い
光に包まれたウィルとレイの姿は消えていた

「さて、村の人たちを助けに行く道すがら
幾つか聞きたい事があるけれどいいかな？
ディノス・ヴェルンさん」

孤独の中の魔法使い（後編）

！！

元々ディノス・ヴェルンと名乗ってはいた
レイがフルネームで紹介したのかもしれない
だが、何故いまフルネームで呼ぶ必要がある
・・・考えつくのは一つだ
「もしかして、正体ばれています？」

レヴァンは不適に笑った
「やはり、魔王ディノ・ヴェルンでしたね
って事は私達の村に来るのは
貴方の母親の事ですよね」
そして、すっきりした表情をしている

「何故魔王と言う事が
わかったんですか？
それに母のことも」

「あなたの魔力にね
凄く懐かしい物を
少し感じたんですよ
レイとウィルを先に帰したのは
それを、早く確認したかったからです」
詳しくは村でゆっくり話しましょう
とだけ言って
レヴァンは歩き出した

「そうですね

今は村の人たちを救うのが先決だ」

―◇―

「ちょっとまて！！！」
叫んだ時には既に遅く
周りは木で囲まれた
見慣れた祠がある場所に飛ばされていた
目の前ではレイが目を丸くして驚いている

「人の話も聞かずに、勝手に飛ばしやがって」
既にあそこにいる研究員が気絶してるならば
二人もいれば十分だろうが

「先に帰って、二人を待ちましょう」
レイがニコッと笑った

「そうだな」
一足先に村に行って休むのもいいだろう

「もう魔力が少なくなってて
歩いて行くしかないの
疲れているとは思うけど・・・」
レイはごめんねって表情でウィルを見ている

「別に気にはしない
本より歩いて魔王探しをしていからな
それに、手の火傷などを治してもらって感謝している」
其処まで疲れるような事はしていないしな・・・

「それより、レイの方が大丈夫か？
魔力は消費しすぎると
頭がぼうっとしたり
フラフラすると聞いているが」
レイが照れて下を向いている

「心配してくれてありがとう
でも大丈夫ですよ、これくらい」
と言い終わった同時に
足が縺れてバランスを崩した
それをウィルが受け止める

「何処が大丈夫だ」

―◇―

ポツリポツリと家が立ち並び
道は平らな石をを敷き詰めて出来ている
森で囲まれた村
まるで、外界からの訪問を遮断しているような村だ

レイに道筋を聞いていたから着けたが
そうでなければ、着くのは難しかったかもしれない

レイは背中でスースー寝ている
色々あって疲れていたんだろう
道筋を言った後すぐに寝てしまった

「レイ、着いたぞ起きろ」
軽く背中を揺する

「・・・ウィルおはよう
あれ、もう村に着いてる
もしかして、私寝てた？」
レイが左手で目をこすっている

「良く寝てたぞ
レヴァンの家は何処だ？
とりあえず其処に行くんだろ」

「えっと、こっち」
レイがまだ眠たそうな声で
レヴァンの家の方向を指差した

「ウィルありがと～
ここがレヴァンの家だよ」
レイがウィルの背中から降りて
家の中に入っていく

なんの変哲も無い一軒家
レヴァンの家の初見の感想はそうだった
『深緑の魔術師』通り名を持つほどだから
怪しい薬品や
真緑の内装を想像していたのだが

内装は木製のテーブルに家具に食器
後は廊下があって
その先に2～3部屋が在るみたいだ

ちょっと待っててと言って

レイは奥の一室に入っていった
約5分位して
青いジーンズはいて
白いシャツを着た
レイが部屋から出てきた
両手には掃除用具を持っている

どうやら
汚れてもいい服に着替えたらしい

「今から、客室の掃除をするから
また少し待っててね」
そう言って、向かいの部屋に入って行った

「・・・暇だ」

―◇―

「びっくりしたぁ」
後ろから声が聴こえたので
剣を振るのをやめる

「ウィルが居ないと思ったら
外で剣を振ってたんですね
危なく無いですか？」
レイが冷や汗を流しながら聞いた

「問題は無い
一応、近づいてくる人の気配には気付く

それに型の練習だしね」

「型・・・？」
レイがそれは何？
と首を傾げている

「うーん、パターンかな
相手がこうきたらこうする
そういった動きだよ」
そう言って心眼流の基本の型の一つ『流れ』を実演する

刃物と対する時の型で
相手の武器の刃を受止め
そのまま剣を滑らせ相手の胴を斬る
ナイフとか短い刃物相手にはむかないが
長剣などだと、滑らせる勢いがつきかなりの威力になる

「よくわからないけど、すご～い」
レイが笑顔で拍手をしている

「レイがこっちに来たって事は、何か様？」
レイがハッと気付た様子を見せた

「部屋の準備が出来たので、案内します」

案内された部屋は案外広かった
並みの宿の部屋と比較するまでも無い
レイから聞いたところ
普段から訪問に来た客が泊まる為に在る部屋だそうだ

「ゆっくりてて下さいね」
レイはそう言って、扉の方へ向っていく

「ちょっとまってくれ」
レイが何??と振り返る

「このまま此処にいても暇だから
何か手伝えることはないか?」
疲れているレイに頼り切るのはよくない

「ウィルは客人だから、
暇をしてても大丈夫ですよ」
拳を軽く唇の下に当て
クスリとレイが笑った

「どうしてもっ、て言うのなら
手伝ってもらいますけれど」

「じゃあ、そのどうしてもって事で」
えっ、とレイが驚く

「本当に手伝ってくれるんですか」
レイが両手をバタバタとさせている
喜んでいるのか
それとも、戸惑っているのか

「そんなに、俺が手伝うのが不思議か?」
頭に手をあて、一息つく

「少し意外でした

ウィルってそういうの
やりそうなタイプに見えないから」
レイが下から笑顔で覗き込んだ

「意外か・・・
修行中に師匠に色々叩き込まれたから
大抵の事は出来るのだが」
ふと、師匠の事を思い出した
『師から離れ一人で世界を回る事も勉強だ、頑張れ！！』
といった内容の置手紙を残して
何処かに行ってしまってからまだ会っていない

「色々叩き込まれたって
修行って、花嫁修業だったの？」
レイが凄く意外そうな顔をしていた

「違う剣技の修行だ
師匠が武術だけ出来る人間ではダメだ
と言っていていてね
料理や掃除等も叩き込まれたんだよ」
確かに一人旅をしていた時に
それらを叩き込まれていたお陰で
助かった事もあったな
ちょっと感慨深くなった

「なるほど、良い師匠さんですね」
レイがウィルにニコッと笑顔を向けた

「もう掃除は一通り終っているので、
レヴァン達が帰ってたらすぐに食べれるように

夕飯の支度を一緒にしましょうか」
そう言って、レイは台所に案内してくれた

「所で何を作るんだ？」
レイは
冷却の魔法をかけた木材で作られた
冷蔵棚から色々な食材を取り出していた

「そうね・・・ウィルは魚を捌ける？」

「問題無い」
大抵の魚は修行時代に扱った

「よかった
レヴァンが冷凍させている
フレスフィッシュがあるから
それを頼めます？
私は捌き方がわからなくて」
そう言って凍ったフレスフィッシュを2尾取り出した
相変わらず平だ

「了解、一度常温で解凍させなくてもいいか？」
凍ったままでも捌く自身はあるが
多少味が落ちる可能性がある

「ちょっと待って」
レイはがさごそと戸棚の奥を探り始めた

「あったあった」
レイがそこから怪しい粉が入ったビンをを取り出した

「なんだ、それは？」
一見しただけでは
何に使うのかが解らなかった

「レヴァンが解凍するときはこれを使えって」
凍った魚に怪しい粉をかける
たちまち氷が融け
フレスフィッシュが釣り上げられた後の様に
ピチピチとまな板の上で跳ねている

「凄いな・・・」
仕組みが全くわからない

「この魚、刺身にして大丈夫か？」
これだけ生きの良い状態ならば
生で食べる事も出来そうだ
特にフレスフィッシュの縁側に当る部分は
歯応えが良くて美味いと聞いたことがある

「調理法は任せます」
レイが軽く返事をした
レイの方は野菜を切っている様だ

まず
魚の血を抜いて内臓を取り出す
氷水にサッと通して
薄く切って皿に盛り付ける

「凄い、こんなに薄く切れるものなの」

レイが後ろから背伸びをして覗き込んできた

「刃物の扱いは得意だからな」
ウィルは黙々と魚を切っている
その様子をレイがまじまじと見詰めている

「レイの方はもう終ったのか？
野菜を切っていたみたいだが」

「こっちはサラダを作ってしまって
あと、野菜のスープを・・・あっ」
レイはそう言うと
鍋の置いてある場所に走っていった
鍋が噴出していて
あわてて火を弱めている

なんだか
凄く懐かしい光景を思い出した
まだ、師匠の下に行く前の
暖かい光景
少し口元が緩んでいた

―◇―

「ただいま」
「おじゃまします」
玄関の方で声がする
レヴァンとディノスが帰ってきたようだ

「お帰りなさい、

丁度よかった、今夕飯ができるところです」
レイが笑顔で野菜のスープをよそいでいる

「お疲れ、遅かったな」
ウィルは薄く切った魚の身を皿に盛っている

「村の人たちを、家に送り届けていましたからね
しかし、レイとウィルくんを見ているとまるで兄妹のようだね」
レヴァンがクックックと笑っている
ディノスもハハハッと笑っている
髪の色は違えど
厨房に並ぶ二人は仲の良い兄妹の如く
テキパキと食事の準備をしている

「茶化していないで
さっさと席に着け
流石に疲れているだろう」

「長く生きてきましたけれど、
魚を生で食すのは初めてですね」
レヴァンがジッと魚が盛られている皿を見ている

「この食し方は此処より
結構北の地方独特の物らしいからな
俺も師匠に教わるまでは知らなかった」
魚の生臭さをとる為に
黒い液体につけて食べる

生で食える魚と食えない魚を体で覚えろ
と、師匠が大量の生魚を持ってきた時の記憶が蘇った

『師匠・か・・体が痺れて・・・きました』

『それは、マンドフグだ
体全体が痺れてきて、自由がきかなくなる
運が悪いと心臓麻痺で死んでしまうから気をつけろ』

こっちは死にかけているのに
淡々と書物を読んでいた師匠の姿

おかげさまで
魚には強くなりましたが
次ぎ会った時、殴らせてもらいますよ・・・

「ウィルどうしたの食が進んでないけれど？
まさか、食欲が無い？」」
レイが心配そうにこっちを見ている

「あ、いや大丈夫だ、
少し昔の思い出を振り返ってただけだ」
そう言って
レイの作った野菜スープを飲む
懐かしい味がした気がした

―◇―

楽しい夕飯の一時も終り
机には空になった食器が並んでいる状態になった

「全て平らげてもらうと、
作る側も嬉しいね」
レイが嬉しそうに
ウィルに同意を求めた

「そうだな」
笑みが毀れている
ウィルも満更ではないようだ

「後片付けは私がやるから
3人は休んでて」
そう言って
レイは机の上にある空になった皿を
台所に運んでいった

「作ったよしみだ、俺も手伝うよ」
そう言って、ウィルも台所に向って行った

「ディノス、すみませんが
少し話したいことがあるので
奥の部屋まで来てくれますか？」
レヴァンは真剣な表情をしている

流石にそんな表情をされたら、断れない

―◇―

レヴァンの部屋は机とベッドと本棚が
キチンと整頓ているシンプルな部屋だった

「適当に座ってください」
一番近くにあった木でできた椅子に腰を掛けた
軽くキィッと音が鳴った

「今日はありがとうございました
全員無事に村に帰ることができましたし」
紅茶を淹れたコップを机の上に置き
レヴァンもディノスと向かい合うように椅子に座った

「運が良かった・・・
としか言いようが無いですよ
それに、僕が行った時にはすべて終っていたようなものだったし」

「そうですか・・・
ディノスさんが此処に来たのは
確か母親の事で、でしたよね」
レヴァンが少し遠い目をした様に見えた

「はい
実は母の過去と言うものを良く知らなくて
母は人間なのに、何故魔王と呼ばれる父の元にいったのかとかね」
書物とかを読むと
母が生きた時代は
人と魔族が今よりも相容れていない時代だった

「少しきつい話になるかも知れませんが」
レヴァンはそう言いい
紅茶を一口飲んだ

話すのを躊躇っている様にも見えた

「ディノスさんの母親は
この村では、裏切り者扱いされています
話すことすら禁忌に成る程に・・・」
レヴァンがゆっくりと話し始めた

「今この村で、ディノスさんの母親である
ウォルナ・フェリデさんの事を語れるのは
私くらいでしょうね」
レヴァンはコップの淵を持ち
コップを揺らしている
どの様に話すか頭の中で構成をしている様に見えた

そううういえば
母の旧姓がフェリデだと言う事を初めて知った
殆ど自分の昔の事は話さない人だったから
・・・フェリデ！！

「まさか・・・
母の姉はフィルナ・フェリデになるのかな？」

「そうですが
知らなかったのですか？」
レヴァンが少し驚いている

「物凄く優秀な姉がいる、
とは聞いていましたが
一部の地域で神格化される程の人だったとは」
彼女の事を書いている本も数冊出ていて

実際に何冊か読んだことがある
どれも、妹がいると言った事は書いていなかったが

「フィルナさんも
心優しい妹がいたとよく言っていました・・・
ただ、彼女が余りに有名になり過ぎて
周りの人々が魔王の元に行った妹の事を知られないように
工作をしていたみたいです
周りの人々って言っても主にこの村の住人ですけれどね」
レヴァンがふぅっと溜息をついた

「少し、話がずれてしまいましたね
ウォルナさんの話に戻しましょうか
とは言っても、フィルナさんに聞いた話が主になりますが」
レヴァンは頭を軽く抑えている

「素質は姉のフィルナさん以上だと言ってました
ただ、魔法は全く使えなかったらしく
ウォルナさんもそれを気にしたみたいです」

「使えない？
母は魔法を使っていましたよ
僕が怪我をしたとき時に治癒魔法を」
数少ない母の記憶の中の一つ
優しい光が傷口を包んで
傷が癒されたときは凄く不思議だった

「ふむ
ウォルナさんは治癒系統の魔法を得意としていたんですね
この村は攻撃系統の魔法使いが多いので

治癒系統の魔法使いは異端とされていますし」

「異端・・・か
魔法の素質は人によって違うのにね」
こう言った話を聞くと溜息が出る
伝承や言い伝えに迷信
魔族間にも多くあった
どれも思い込み、偶然、ねたみ等が重なってできた物だった

「ですよね
この村は神経質な所がありますよ
他の町や村と離れていて
外部との接触が殆ど無いのも原因でしょうが」
今度は二人して溜息をついた

「レヴァンさんはこの村の出身では無いのですか？
今までの話を聞いているとそう思えてしまうのですが」

「いえ、一応この村の生まれですよ
ただ、私もこの村にとっては
異端の一種なのかもしれませんね」
レヴァンは笑いながらそう言った

「異端の一種ですか・・・」
コップに入った紅茶を飲む
もう温くなっていた
少しレヴァンの過去を聞いてみたいと思った

「深緑の通り名が有るほどの
レヴァンさんでも異端・・・なのですか？」

「ははは、
この村にとっては異端な方ですよ
今こうしてウォルナさんの話をしていますしね」
レヴァンは笑顔で答えた
本人は別に異端であることを気にしていない様子だった

「そこも気になるんですよ
禁忌となっている事を話したり知っていたり」
腕組みをしてうーんとうなる
母の事が禁忌になっているわりには
僕がこの村に来た理由が母の事だと解っていたし
何の抵抗もなく母の事を話してくれている

「そうですね、
フィルナさんに色々聞いたこともありますが」
レヴァンは一息つき
少しの間目を閉じていた

「イルミナの影響も大きいですね」
レヴァンは少し悲しい表情をしていた

「イルミナさん・・・？」
この村の住人の一人なのかな
聞いたことの無い名前だった

「フィルナさんの娘ですね
恐らく、表舞台に名前が出ることはもう無いでしょうが」
レヴァンの目線が窓の方向に向いた

「母がフィルナさんの妹だって事でさえ驚きなのに
フィルナさんに娘がいたって」
まさに驚いた・・・としか言い様がなかった

「この事も、村の中では禁忌となっていますからね
村の外にはそういった情報が一切行っていない思います
それに妹がいたって事も今となっては、関係者くらいしかしらないですよ」
レヴァンの目線はまだ窓の方を向いたままで
窓の外の暗くり星が瞬いている景色の
さらにまだはるか向うを見ているように見えた

「彼女は、私が『深緑の魔術師』の名を貰うきっかけとなった人です」

「レヴァンさんが通り名を貰うきっかけとなった人ですか」
ディノスが腕を組み
机に前屈みになって
確りと聞く体制になっていた

「『きっかけ』と言っても
単純なものですけれどね
私がイルミナを好きになった事・・・ですから」
レヴァンが椅子の背もたれにもたれかかる
椅子が後方に少し揺れ
キィッと木の軋む音がした

「フィルナさんが亡くなってから
村の人たちのイルミナに対する態度は更に酷くなり
彼女が日中外出できる事は殆どなくなりました

村の人たちがフィルナさんに娘がいたと言う事を知られない為に
まぁ、私はこっそり会いに行っていましたが」

今でも忘れる事が無い
『もう来ないで・・・
このままだと貴方が死んでしまう』
胸にしがみいたイルミナに
大粒の涙を目に溜め
震える言葉で言われた事を

「彼女を自由にするには当時の私では力が足りなかった
だから、力と名を欲しましたよ
強ければ
そして、多くの人に認められるようになれば
彼女を救える
と心から信じていました
浅はかな考え方でしたけどね」

「一刻でも早くフィルナさんを超えれる様
色々な国を巡り
色々な事をしました
でも、結局間に合いませんでした
今から13年前、彼女が病気で亡くなりました
皮肉にも私が村を出てから4年後
『深緑』の通り名が知られるようになり
これで、彼女を守ることができると思って
村に帰った日・・・でした」
レヴァンはこの事を凄く後悔しているように見えた
時折言葉がつまり
視線は常に下を向いていた

「家には彼女と3歳ぐらいの女の子が居て
女の子がイルミナの看病をしていました
早期に治療すれば完治できる病だったのですが
私が行った時にはもう手遅れで・・・
彼女と数分間だけ話せただけでした
そして、彼女に誓いました
残された彼女の娘を私が守ることを」
レヴァンの言葉が少し強くなった
再び立てた誓いに対しての決意をかみ締めるかのように

「そうか、その娘が・・・」
全てを理解したわけでは無かったが
何故この話をレヴァンがしたのか
そして
おそらくレヴァンがこれから言わんとする事も

「はい、レイです
名前は私の名前の頭文字と
イルミナの名前の頭文字から
イルミナがつけました」

―◇―

「長いな、ディノス達はまだ話しているのか」
数十分は経ったと思うが
レヴァンの部屋から出てくる気配は一向に無い
食器の片付けも終わり
食後のデザートを作ったのだが・・・

「レヴァンが奥の部屋で話をする時は
大抵長くなっていますからね
後一時間くらいは話し込むと思いますよ」
レイがふと外に目をやった

「あっそうだ、
今位の時間だと」
レイが何かに気付いた様子で
すっと椅子から立ち上がった

「レヴァン達の話も長くなりそうだし
少し外にでませんか？」
くるりと出口のほうに体を向ける
翡翠色の髪がたなびいた

「外？
もうかなり暗くなっているぞ」
この村には余り明かりが無い
特に今日のような日だ
皆疲れて眠っているのだろう

「暗くならないと
見れないものもありますから
騙されたと思ってちょっと来て」
そう言って
レイが外に出て行った

「はぁ、仕方ないか」
デザートを冷蔵棚に容れ
レイに続いて外に行った

―◇―

レイにつれられて行き着いた場所は
村の畔に流れる小川の上に架かっている石橋の上だった
サラサラと小川が流れる音が聞こえる意外
特に何があると言う場所ではない

「あれ、まだ少し早かったのかな？」
レイが石橋から小川を覗き込んでいる

「早い？
いったい、何を見せようとしているんだ？」
小川を覗き込んでも
闇に照らされて黒くなった小川しか見えない

「おきてからのお楽しみってことで」
レイが笑顔でそういい
石橋の上に座った
ウィルも続いてその横に座る

「今日はありがとうございました
ウィルたちが助けてくれなかったらどうなってたか」
レイがウィルに向かってぺこりとお辞儀をする

「運が良かった・・・
としか言い様がないがな」
本当に偶然とだった
しかし、レイに会えず
そのままこの村に来ていたら

誰も居ない村に何日滞在することになったか

「運が良かったか
確かにそうですね、
ただそれを言ったら元も子もないような」
ハハハッとレイが軽く笑って
ウィルの方を叩いた

「そう言えば、
ウィルたちはどうしてこんな辺鄙な村に来たのですか？
特に特産品がある訳ではないし」
レイが首を傾げている

「ディノスがよりたいって言ってからね
それに丁度、近くまで来ていたから」
確かに、一般道からかなり離れているし
ディノスに聞くまで名前さえ知らなかった村だ

「そうだったんだ
でも、ディノスはなんでこの村に来たいと言ったんだろう」
うーんとレイが唸った

「俺も聞いてないな
レヴァンと話し込んでるし
レヴァン何か聞きたい事があったのか」
何も考えずに来たが・・・
ディノスとレヴァンの話し合いが終ったら聞いてみるか

「そうだ、唐突になるんですが」
レイがそう言った後

少しの間ができた
レイはグッと拳に力を入れた

「私をウィルたちの旅に参加させていただけませんか？」
決意に満ちた声だった
真直ぐウィルを見るその目にも決意が感じられた

「な・・・無理だ
そもそも危険すぎるし
レヴァンたちにどう説明するんだ」
まさか唐突にそんなことを言われるとは思わなかった

「危険・・・ですか」
レイが不思議そうにウィルの方を見る

「そう、危険
モンスターとか魔族とか盗賊とかいるからね」
大きい戦争が終って数十年経ったとは言え
まだ、世界的に治安が良くなっているわけではないし
そもそも、何故旅について来たいかもわからない

「う～ん
でもどの道
私は旅に出ないといけないんですよ
試練が終ったから」
レイが腕を組んだ
少し剥れている感じだ

「そうなのか？」
呆気にとられた

試練だけでも少し無茶だったと思うが
旅を知らない若い素人が旅にでるとは
・・・危険ではないか

「うん
試練が終ったら
試練を受けたグループで
大体1年から2年くらい世界を廻るように」
確かグループは三人以上だったな
恐らく試練を合格したチームのみ旅に出る資格ありという形なのか？
今回は偽りの試練だったから試練本来の何度は解らないが

「他のグループ同士で組む様な事はしないのか？」
確かに今回は訳ありで、俺らとグループを組んだが
特に見ず知らずの俺達についてくるって事も無い

「他の人はやったりするけれど
私は無いかな」
レイは小川の終着点の
さらに向こうの暗闇を見つめた

「なぜ？」
他の人がやっているのなら
やればいいだけの事だと思うが

「私が話そうとすると
皆いやな顔をするの
蜘蛛の子を散らすように逃げたりね
だから、同年代の人と話すことさえないし」
レイは俯いた

「ごめん、なんか悪いことを聞いたかな？」
左手で髪をかきあげ
下を向く
レイに会った時
彼女が一人だった理由が理解できた
これは、話の流れで気付くべきだとも思った
同時に何故レイの様な良い人がそういう状況になるのか
疑問に思った

「大丈夫ですよ、もう慣れましたから
それにどの道、今回合格できたのは私だけでしたし」
慣れているようには聴こえなかった
悲しそうな表情も慣れているようには見えなかった

「てっきり
今回の試練は無効になる思ってたが
レイだけ合格って事になってるのか？」
意外だった

「そうだよ」
レイはウィルの目をじっと見ている

「そうか・・・」
合格が一人か
一人で旅をするよりは
俺達の旅に同行した方が安全だが
しかし・・・
頭を抑えて考える

・・・暫しの沈黙

「わかった、
旅の同行の件はディノスに聞いて
ディノスもＯＫも出したら
レイの目を見る限り
レイがおれるって事は無さそうだ

「よかった～」
レイがホッと胸をなでおろした

「・・・ん、なんだ」
辺りにポツポツと小さい光の球が拡がっていた
光は点いたり消えたりしながら右往左往している

「綺麗でしょ
ハツロと言う虫らしいです
今の時期はこの小川に毎晩現れるんですよ」
レイが見せたいって言っていたのはこれか

「懐かしい・・・」
昔見た景色がフラッシュバックし
思わずそう呟いていた

「懐かしい？
ウィルも見た事があったんだ
驚かせようと思ってたのに」
レイは少し残念そうな顔をしてる

「俺の出身はかなり田舎だったからね

小さい頃は家族で近くの川まで見に行ってたんだ
虫の名前は初めて知ったけど」
もう二度と家族で
その川を見に行く事は出来ないと思うと哀しくなった
綺麗な光の渦がボヤケテ見えた

「ウィル、どうしたの？」
不意に流れていた涙を拭った
ぼやけた視界がはっきりとした
レイが心配そうな顔をしている

「大丈夫だよ
昔のことを思い出して
少し感慨深くなっていただけだから」
気が緩んでいたのか
まさか、過去を少し思い出しただけで・・・
恥ずかしくて赤面した

「まさか
ハツロに何かトラウマがあった？」
レイは悪いことしたかなといった表情をしている

「トラウマとは違うかな
懐かしい思い出に浸ってだけだからね」
何故だろう
レイと話していると昔の頃を思い出す

「そっか、
ウィルの故郷ってどんな所なの？」
レイが興味本位でそう聞いてきた

「なんの特徴もない村だったね
と言っても１０歳ぐらいまでしか居なかったから
よく覚えていないだけかもしれないが」
特産品はなんだったか・・・
まずい、素で忘れた

「１０歳までしか居なかったて事は
１０歳から旅をしていたの？」
レイが驚いている

「していたと言うか
しなければいけなかったと言うか・・・」
う～んと唸って
腕組みをした

「しなければいけなかったって、
何かあったの？」

「１０歳の時
村をね
滅ぼされたんだ
魔王に」
少し正直に答えるべきか悩んだが
どうもレイに嘘はつけないみたいだ
どの道、旅について来る様ならばわかる事だし

「もしかして
ウィル達の旅の目的って復讐？」

「そうだね、
魔王に因縁があるのは俺だけだど
ディノスとは一緒に旅をしているけど
ディノスは世界を見て回るって言ってたし」

「そうなんだ
ウィル達は・・・」
遠くで声が聴こえる
ディノスとレヴァンが俺達を探しているみたいだ

「レヴァン達が探しているみたいだね
戻りましょうか」
レイが立ち上がって
う～んと背伸びをする
翡翠色の髪が
月明かりと
ハツロの発する光に照らされて
不思議な色合いになっていた

「そうだな」

―◇―

「話が終って居間に行って見たら
二人とも居なくて驚きましたよ」
レヴァンは二人を見つけて少し安心した風だった

「余りに二人の話が長いから
ウィルと其処の石橋までハツロを見に行ってたの」
レイが微笑えんだ

「ハツロか
まだ生息している場所があったんだ」
ディノスが感心している

「ん、そんなに珍しいのか？
確かに旅を始めてから見るのは初だが」
田舎にもいたから
何処にもいるかと思ったが
そうでもないのか

「生きれるぐらい綺麗な水が少なくなった事もあって
十数年で数が激減しているからね」
ディノスが少し寂しそうな表情をしていた

「そうなのか」
激減しているとは
思いもよらなかった

「うん
石橋の場所を教えてくれないかな？
僕も見ておきたいから」

「それなら
作ったデザートを持ってくるから
石橋で皆で食べるか」

―◇―

「久しぶりに見るけど、

やっぱり凄いね」
ディノスは石橋から乗り上げて
点滅する光に夢中になっている

「余り前に行き過ぎると落ちますよ」
レイが心配そうにディノスに言った

「流石にそんな事は・・・」

ツルッ

バシャン

ディノスは滑って下の川に落ちた

「ん・・・？
ディノスは何処に行ったんだ??」
ウィルがデザートを4人分持って来た

「滑って川に落ちていきましたよ」
レヴァンが笑いながら下を見ている

「何をやっているんだ」
ウィルは呆れている

「つい、珍しい物に見惚れちゃってね」
びしょ濡れになった
ディノスが川から上がってきた

「ディノス大丈夫?」

レイが心配そうにディノスに駆け寄る

「大丈夫だよ、濡れただけ
寒い時期で無くて助かった」
ディノスはハハハっと笑った

「帰りましょうか・・・」
レヴァンは笑いすぎたのか
お腹を押さえている

「そうね
いくら暖かい時期でも
濡れたままの服を着ていたら
風邪をひきますからね」
レイも帰ることに賛同している

「う～ん、折角だし
ウィルが持ってきてくれたデザートを食べてから戻ろうか」
ディノスが石橋に座った
服からは水が滴り落ちている

「風邪ひくぞ」
溜息をつきつつ
ウィルも次いで座った

―◇―

デザートを食べ終え
一同は家に帰って来た

「早くお風呂に入って来た方良いよ
着替えはある??」

「着替えは持ってるよ」

「じゃあ、タオルだけで大丈夫かな」
レイがディノスにタオルを渡して
風呂場の場所を教えた

「ありがとう」
ディノスはペタペタと風呂場のほうへ走っていった

ディノスが風呂場の方に走っていくのを見送ってから
レヴァンが口を開いた
「ウィルに頼みたいことがあるのですが」
何とも真面目な趣をしている

「聴けることならば」
何となく
何を言われるか解った気がした

「ディノスには言ったのですが
今回の試練の合格者はレイたった一人なんですよ
なので、できるならばレイを貴方達の旅に同行させていただきたい」
・・・やはりレイと同じことを

「う〜ん
ディノスは何て言ってた」

「ウィルがＯＫを出すようならば別に構わないと」

ディノスもＯＫを出したか

「二人して同じことを言ってたんだね
そして、答えも同じって」
レイがクスクスと笑っている

「レイにも同じようなことを言われてね
ディノスがＯＫを出すようならば
旅に同行させるって答えたんだよ」
まさか、二人して同じことを思っていたとは
少し可笑しくて笑みがこぼれる

「そうでしたか、
ありがとう御座います」
レヴァンが深々と頭を下げた

―◇―

夜が明けて
出発する日の朝が来ました

「ディノスにウィル
レイを頼みます」
レヴァンはディノスとウィルに深々と頭を下げました

「レイ、旅をしていると
大変な目に合うと事もあると思いますが
それと同時に村に居ただけでは体験できない
驚きや楽しいこともありますから
色んな世界を見て成長してくださいね」

レヴァンは目に涙を溜めていました

「今生の別れじゃないんだから
そんな顔をしないでよ」
ふと
嫌な予感が頭を過ぎりました
その予感が何なのかは解らなかったけれど
レヴァンに会えなくなってしまう様な
そんな予感が

「え・・・
今生の別れをする様な顔をしていましたか」
レヴァンが少しギクリとしたように見えました
・・・まさか何か危ないことをしようとしているのかな

「していましたよ
見たことも無いくらい凄く悲痛な顔を
見送る側の顔では無いですよ」
少し大げさにレヴァンの顔マネをする

「それに、また帰ってきますよ」
軽く笑ってみせる
少しでも不安が飛んでしまうように

「私も
何時帰って来られても良い様に
しておかないといけませんね」
レヴァンが少し笑った

「名残惜しいけど

そろそろ行くね」
まだ居たいけれど
ずっと此処に居る訳にもいかないし
それにそろそろ限界だし

「そうですね、
気をつけて下さいね」
レヴァンが寂しそうに手を振った
ウィル達と村の入り口を出て
街道を歩いていく

「行って来ます、お父さん」
１００ｍ程離れた所で振り向いて
レヴァンに向って笑顔で手を振って
大声で叫んだ
初めてレヴァンに『お父さん』と

―◇―

暫く呆気に取られました
父親であることを明かしていない為
『お父さん』と呼ばれることは無いと思っていたが

「歳をとると涙腺が緩くなっていけませんね」
ボソッと呟く

「イルミナの娘を旅に出したのか」
長老のギブ・ロンが１０ｍ程後ろに立っていた
辺りには殺気が充満している
恐らくいるのは長老だけでは無いだろう

「えぇ、１６歳で試験に合格したものは
村を出て旅をするという掟なので」
実際は今日のこの日の為に
数年前に私が作ったものだ
色々と誤算はあったが
一先ずは成功したと言えるだろう

「ふん、小癪な通り名を持つほどなので
色々と多めに見てきたが
之ばかりは許しがたい」
ギブは凄い眼光でこちらを睨んでいる

「そもそも
レイがフィルナさんの孫だって気付く人はいないですよ
それに、先日謎の集団から助けてもらっておいて・・・」

「それと之とは別じゃ
この村にいるだけならまだよかったが
村を出るとなると危険因子は排除しなければならん
フィルナ・フェリデは潔白でなければならんのじゃ」
ギブが私の言うことを遮って
強い口調でいった

「そんな風に神格化される事を
フィルナさんは望んでいない
彼女はただ平穏に暮らす事を望んでいただけだ！！！」
くだらない
フィルナさんはいつも子供を見て
『この子が幸せに育ってくれるたら私は幸せだ』とか

『最近周りが騒がしくなって息苦しくなってきた』といっていた
フィルナさんの言葉を思い出して
怒りがこみ上げた

「もはや
個人の感情ではどうし様も無いところまで来てるんじゃ
それに気づけ！！！」
ギブは怒りの感情をあらわにして怒鳴った

「個人の感情ではどうし様も無いところまで来ている？
その考え方事態が個々人の感情他ならないですよ
私は世界を旅してきましたが
殆どの国では彼女は高名な魔法使いとして扱われています
神格化している地域など殆ど無い
この近隣の余り外界との接触の無い地域だけです」
実際に見てきた事を話した
ギブはグッと唸って暫く沈黙していた

「まぁいい
村の数人を彼奴らに向わせた
とっ捕まえてから、ゆっくり処分を決めようか」
最早、聴く耳持たず・・・
ですか

「レイ達を捕えるのは無理ですよ
今頃追いかけていった人たちが迷子になっているんじゃないですか」
レイ達に魔法をかけていた
魔力の情報を遮断し
また、追おうとするものを深緑の森にいざなう魔法を
之を使うと大抵追いかけるのは無理になる

「貴様！！何をした！！！」
ギルの顔は恐ろしく真っ赤になっている

「別に答える必要も無いでしょう」
態々、種を明かすのもアホらしい

「この村を敵に回すつもりか・・・
いくら『深緑の魔術師』と言えども
村全員でかかれば只では済まんぞ」
血走った目で睨んでくる

「敵に回すとか、そんな気はないんですけどね」
村全体と敵対することはわかっていて
当初は自分の命でけりをつけようと思っていた
ただ、それをする気はもう無い
何が何でも生き延びないといけない

「こんな事で村を廃村にする気も無いですし」
少しだけ軽い脅しを仕掛けた

「言い訳無用！！
おおよそ『霧隠』系統の魔法を使っているのだろう
解かぬならば、殺してでも解かねばならん」
この村の人たちは本気だ
もう詠唱を始めている人たちもいる

「娘が旅から帰ってきたときに
迎え入れれる準備をしないといけないのに」
溜息をついて

臨戦態勢をとった

―◇―

「別れの挨拶はあれ位でよかったのか？」
ウィルが少し心配そうに言った

「うん、
笑顔で出発するって決めてたから
あれ以上いたら
多分我慢出来ずに泣いてたと思うから」
レイが目に涙を溜めながら
笑顔で答えた
少し無理をして笑っているように見えた

ウィルは何も言わず
ポンっとレイの頭を撫でた

レイはその場で膝を落として
声を出して泣き崩れてしまった

ウィルはレイが急に泣き出したので
何かまずい事をしたかと思いオロオロした

レイは暫く泣いていた

「御免ね
やっぱり故郷を離れるのが少し哀しくて
つい涙が・・・」
レイが目をゴシゴシして涙を拭いている

「辛いならば
村に戻っても良いぞ」
ウィルが気を使いそう言った

レイは首をフルフルと振った

「大丈夫ですよ
一度泣いたら、スッキリしたので
それに、色々と旅をして
レヴァンに沢山お土産話をしないと」
そう言って、笑った
今度は無理をして笑った笑顔ではないようだった

「ウィルとディノス改めてよろしくお願いします」

監獄の町（前編）

一体、何十年経ったのだろうか

いや、見えている場所が見覚えの無いだけで
実は数分と経っていないのでは無いのか

私はまだあの場所にいて
夢でも見ているのか

夢・・・
と言うのが
一番確立が高い気がする

まるで
この体が
自分の物で無いかのような錯覚

私の魔力はこんなものだったのか
視点の高さはこんなものだったのか
・・・私の名前はこれで良かったのか

うっすらとある記憶が正しいのか
その記憶も夢の一部でしかないのか

・・・私は一体何者なのか

―◇―

「グロウ、大丈夫？」
ハッと我に返った、目の前にはティセが立っている。
「ん？何？」
また、少し記憶が飛んだのかな、状況が掴めない。
「何？って、また、ボーっとしてたでしょ、サラ姉さんの言っていた事、聞いてた？」
ティセはむすっとしている。
「御免、聞いてなかった。」
スパーン
大きい音と共に走る頭への衝撃。
「サラ姉、何すんだよ。」
頭を抑え涙目になりながら、ハリセンが飛んできた方向を向く。
そこには、右手にハリセンを持ったサラ姉が仁王立ちで立っていた。
「話を聞いていなかったからよ
いい？今日も城の兵達に盗みを働きに行くけど
一歩間違えて捕まれば、問答無用で切り殺されるのよ
確りと今日の作戦を聞いておきなさい。」
サラ姉はそう言うと、作戦を説明し始めた。
―◇―
一目で解る異様な光景、森の木々よりはるかに高く、森の広さよりはるかに広く。
目の前には巨大な壁が聳え立っていた。

「なんだこれは？地図にも載っていないが。」
ウィルが地図を広げて地図の現在地と目の前の壁を見比べていた。
「大きい建物ですね、私の村にはこんなに大きな建物無かったですよ。」
レイは少し楽しそうに壁を見上げている。
「ディノスは知ってるか？」
ウィルが地図をたたみながら、ディノスに聞いた。
「僕もちょっと解らないね、迂回していくしかないのかな
壁が何処まで続いているのか解らないから、此処の中を通って行きたいけど。」
ディノスはうーんと唸っている。
「ん、あそこで行商人っぽい人が壁の中に入っていったな
もしかして、あそこが入り口なのか？」
数十メートル先で、荷物をたくさん担いだ人が壁の方へと消えていったのが見えた。
「じゃあ、其処に行って見て、通り抜けられる様だったら通り抜けて行こうか。」
行商人らしき人が入って行った場所、其処には大きな扉が一つあるだけで
特に通行人を監視する人はいない、扉を押すと簡単に奥に開いていった。
扉の奥には、家や店が広がっている、向こうの方にはでかい城も見える。

「城があるってことは、どうやら、此処がエデュミニオンらしいな
地図を見た限りだとまだ北だと思ったが。」
一度たたんだ地図を再び開いて現在地を確認する。

「なんか、殺伐としていますね、外の町って何処もこんな感じなの？」
レイは期待が外れたのか残念そうに肩を落とした。

レイの言うとおり、この町は殺伐としていた、この位置から一目見ただけでもそうと解る。
町にはまるで活気と言うものがまるで無く、道行く人もまばらだった。
その町の人々が可哀想な人を見るような目でこっちを見てくる事は気になった。

「いや、此処まで活気がない町は滅多に無いな、何かあったのかな。」
活気が無い町では余りいい思い出がない、少し警戒した方が良いかもしれない。

「ディノス？」
ディノスは考え込んでいる様子で、視点を深く落とし少しも動かない。

「はっはっはっは、また新しいカモが来たのか」
甲冑を着た大男が近寄ってくる。
・・・カモ？

「ようこそ、エデュミニオンへ、無事にこの町から出られるといいな。」

大男がガハハと笑った。

「どういうことだ。」

「坊主、口の聞き方に気をつけたほうがいいぞ。」
コンコンっと大男が剣の鞘で頭を小突きながら笑っている。

「坊主だと。」
一々癪に障る男だ、ジィッと目の前の大男を睨み付ける。
大男もジィッとウィルを睨み返す、大男は腰に携えている長剣に手を掛け何時でも抜けるようにしている。

ピリピリとした空気が辺りを漂っている。

ドンッ

「っ？」
不意を突かれたので後ろに仰け反った。
何かがぶつかってきたと思うが
一瞬の事で何が起きたのか解らなかった。

「ちっ、奴らか！！貴様運が良かったな。」
大男が急に路地に向って走っていった。

「ウィル大丈夫ですか？」

「ああ、なんだったんだ？」
ズボンのポケットの辺りに、少し違和感を覚える。
何か少し軽くなったような、在るべき物が無いような。

「しまった！財布をすられた」
ポケットに入れていた財布が無くなっていた。

「えぇっ」

まさか、さっきぶつかった時に？
大男もすられたのか、だから急に路地に向かって。
急いで広場を見渡すが、時既におそし。
もう、ぶつかって来た奴が見えない。
そもそも、ぶつかってきた奴の姿さへ見ていないのだが。

「恐らく、さっきぶつかった時だ。」
いくら大男に注目が行っていたとはいえ、気付かなかったとは・・・
不覚。

「しかし、あんた等運が良かったな
あんな命知らずな事をして殺されても文句を言えないぞ。」
声がした方を振り返る、細身の青年がそこに立っていた。
おそらく様子を静観していたのだろう。

「命知らずのことって、単に睨みつけただけなのだが。」
それくらいで殺されてはたまらない。
まぁ、ぱっと見た感じで、あの大男程度なら軽くあしらえていただろうが。

「この町では、それだけで十分危険だよ
　この町ではさっきの様な兵達が力を利かせていてね、殺されても罪には問えないし
　こちらが手をだそうものなら、捕まって処刑される、そんな町だよ。」

青年はさらっと恐ろしいことを言った。

「凄く物騒な町に入ってきちゃいましたね。」
レイが不安そうにそういった
ギュッと掴んできた手は少し震えている。

「そうだね、早く出たほうが良さそうだ。」
早く反対側まで進んで、町の外まで出たほうがいい。

「それが賢明だが、この町を出る時には金を払わないといけないぞ。」

「金を何故？」
金を払わないと出ることのできない町なんて、今まで旅をしてきて一度もなかったし
そんな町があることを初めて知った

「わからないよ、国王がかってに決めた事だから、
この国から出ようとするならば滞在税を払えってね。」
青年から聞いた金額は、少しありえないと思える金額だった、財布を落としたのは痛すぎる、落としていなくても、この町から出ることの出来る可能性は限りなく低かったが。
この町に入ったときの町の住人の哀れみに満ちた目の理由が解った気がした。

「・・・あれディノスは？」
レイが首をかしげている。
辺りを見渡して、ディノスを探す、確かに、ディノスが見当たらない。

―◇―

罪悪感といったものは特に無い
町の皆から奪い取った金だから

兵から盗んだ金を町の人たちに配っているけれど
別に義賊だと言うつもりは無い
元々あったものをあった場所に返しているだけだ
それでも、まだ町のみんなの生活は楽にならない

一つだけ思う事があるけど
それを実行するには
まだ色々と足りない

―◇―

今回は珍しく楽だったと思う
ターゲットにした兵士は見たことの無い金色の髪をした男と言い争っていて隙だらけだった。
つい、金髪の男の財布もすってしまったのはミスだが
しかたない、次に見かけたらポケットに投げ込んでおこう。

「誰？」
気配がした、兵はまいた筈だし、金髪の男は追ってくる気配すらなかった筈だけど。

「さっき、君が盗って行った物を返してもらえないか？」
黒髪の男が肩で息をしながらそう言った、右手には黒い槍を携えていた。

「あぁ、さっきの金髪の男とちっちゃい女の子の後ろにいた。」
まさか、ボーっとしていた男の方が追いついてくるとは思いもしなかった。
それよりも見えていた事に驚くべきか、人は見かけによらないとはよく言ったものだ。

「こっちは返すわよ、この町に来た人から盗る気は無いから。」
金髪の男の財布を投げて返す、黒髪の男は顔を上げてそれを受け取った。
顔を上げた一瞬、あたしの顔を見て驚いたように見えた。

―◇―

見えたのは、ウィルの財布がすられた所のみ。
圧倒的に速かったので、持ち主の体を羽のように軽くする付加属性を持つ黒槍を持ってしても完全に姿を捉えて、追いつくことは出来なかった。
それでも、何とか見失わずに裏路地まで追い駆けてウィルの財布を返してもらったが
盗人の顔を見て驚いた、財布を盗って行ったのがまだ、十六～十八歳に見える女の子だったとは。

こんな子が窃盗をする事いい。
殺伐としたこの町の雰囲気といい。
此処は本当に、コルト・エデュミナスが治世するエデュミニオンなのか・・・

―◇―

「昔はこの町も普通に栄えていたのだけれどね

王様が2～3年前くらいから急に増税をしだしてね
町から出る人に税を掛け出したのもその時だよ。」
話しかけてきた青年からこの町の事情を聞く
ディノスはほっといても帰ってくるだろう。

「なんで、急に増税をしたの？」
レイは首をかしげている。

「それが、全く解らないんだよ、お触れが出て、即増税。」
青年がお手上げだよって言った。

「町の人たちは反対しなかったのか？」
理由も無く急な増税をされたら、大きな反対運動ぐらい起きそうだが。

「大きい反対運動はあったよ、ただ、反対した町の人は尽く殺されたけどね。」
青年は重い口調でそう言った。
刹那な時間、空気が凍りつく。

「そんな・・・」
レイも驚きを隠せていない様子だ
掴んできた手がより力強く握られて腕が少し痛い。

「その騒動で、親を失った子供も多くてね
孤児だけで徒党を組んで盗みとかをする事も多いんだ。」

「と言うことは、俺の財布はその徒党の一派に盗まれたって事か。」
子供にすられていたとは、ショックだ。
「そうだね、姿を見られないほどの手際からしてサラを筆頭とした

兵士からしか窃盗をしない徒党だね、彼女達の場合は心配しなくても暫くしたら財布がひょっこりとポケットに帰ってきているよ。」
盗まれた財布が帰ってくる？
何故？

―◇―

「でも、よく追いついて来れたわね。」
青い髪の少女は感心している。

「まぁね、君はありえない位速かったけど」
本当にありえない、黒槍を使ったのに追いかけるのがやっと
人の速さをと言う物を完全に超越していた。

「こっちも色々とやってるからね」
少女は口に手をあて、クスクスっと笑った。

「しかし、何故こんな事を？」

「そんなの見ず知らずの人に教えるわけ無いでしょ。」
ムッとした少女が、少し強い口調で言った。

「大変だ！！ティセが捕まった！！！」
急な大声にビクッとした、後ろを振り返ると其処には息を切らした
少年が立っていた。

―◇―

「グロウ、詳しく教えて」
まさか、ティセが捕まった、あの子がミスをするなんて。

「兵士から盗もうとして、それで、失敗して・・・」
グロウは少し錯乱している。

「捕まったって言ってたよね、すぐ救出にいくわよ、グロウ場所に案内して。」
捕まっているだけならば、一気にティセを救出して逃げればいい。
あたしにはそれが出来る。

「う・・・うん、でも多分あいつらはサラ姉ちゃんを捕まえる為にティセを殺さないで人質として使っていると思う、行ったら危ないよ。」
グロウは泣いている。

「大丈夫私は捕まらないから案内して。」
サラはニッコリとして、ポンと優しくグロウの肩を叩いた。

―◇―

「何だ？」
周りがざわざわと騒ぎ出した、見渡してみると人溜まりが出来ている。

「あれは、誰か兵士に捕まったのか。」
青年が一気に真剣な顔になり、人ごみの方を向いた。

「どう言う事？」
レイは余り状況がつかめていない様子だ。

「時折、兵を集中して狙っているグループの一人が捕まってね

他のグループへの見せしめに中央広場で公開処刑をする事がある
んだ。」
青年はグッと唇を噛締めている。
「公開処刑、外の世界だとそんな酷い事が平然と行われているの。」
レイは青ざめて今にも泣きそうになっている。
「いや、俺も長いこと旅をしているけど
ここまで治安が酷くて荒れているところは初めてだよ。」
気にするなと、レイの頭を優しく撫でる。
しかし、この町は一体どうなっているんだ、公開処刑なんて二昔以
上前の時代の産物だぞ。
そもそも、窃盗だと長くて精々四、五年の牢獄生活が妥当な刑罰だ。
ただ、これほどの町だと奴が来る可能性が高い。

―◇―

「これは完全に罠だぞ、救出に行くにしても、焦っていては相手の
思う壺だ。」
裏路地から表通りに行く道をふさぐ様に立ちふさがろうとした。
「それくらい解っているわよ、部外者は口を出さないで！！」
サラがナイフを投げる、ナイフは頬をかすめ後ろの壁に刺さった。
「っつ？これは・・・動けない？？」
影縫いか、魔力を込めた物質を影に当てる事で本体にも影響を与え
るという。
ただ、この感覚は魔力と少し違う気が。

「暫くそこで静かにしてて、グロウ急ごう。」
サラとグロウは走って裏路地を抜けて行った。

―◇―

「レイ、とりあえずここから離れようか。」
こういったのは気分が悪くなる。

「うん、そうだね、でも、どうにかならないのかな？
チラッと見えたけど、捕まってる人まだ子供だったよ。」
レイは悲しそうな顔をしている、確かにまだ年端も行かない少女が捕まっている。

「難しいだろうね、あれだけ厳重に囲まれてると。」
屈強な兵士が7～8人、辺りを警戒している、ただ、少しだけ通り道を空けているかのように見える、まるで何かを誘っているかのように。

「兄さんはどうする？」
ジッと捕まっている人を見ている青年に話しかける。
「私は見て行きますよ、あの子はサラ達のグループの子だから
サラ本人が助けに来るでしょうし。」
青年は平然と答えた、サラって言う人のグループと解ったとたん安心しているように見えた。

「と言うことは、アレはそのサラって奴を誘い出す罠か。」
たった一人を捕まえるために、兵士が7～8人必要なのか、いったいどんな人物なんだ。

「でしょうね、ただ、あの人数程度だと無意味でしょうが。」

青年はニヤリと笑っている。
あの人数でさえ無意味、恐ろしく屈強な人物像が目の前に浮かんで来た。

―◇―

「あそこね」
ティセが捕まっている所には兵士が7～8人いるのに
ようこそと言わんばかりにティセまでの道が開いている。

「いかにも、罠って感じがするわね
　まぁ、あたしには何人いようが関係無いけれど」
脚を一時的に速くする為の軟膏を塗る、余り使いすぎると足にかかる負担は大きいけど、
その効果は凄い、並の人では目で捕えることさえ難しい。

「グロウは一応ここにいてね。」
グロウに手を振る、グロウはまた考え事をしているのか、無反応だった。
距離にして四百mくらい、一気に救出をしないと。
ティセのいる方向に向って走る。
ヒュッっと風を切る音。
一瞬で最高速まで達する。

ティセのいる位置まで

百m

五十m

二十m

バチッ

静電気が弾けた時の様な音がし、一瞬目の前が真っ白になる。

「眩しっ、目眩ましの一種？でもそれくらいなら」

ティセが捕まっている場所は解っている

それにこの町はあたしの庭のような物だから

少しの間目が見えなくても逃げ切れる自信はあった。

ティセの場所まであと数歩って所で足が止まる。

「何？体が動かない」

あと少しの所で・・・

なんで、体が痺れて、力が入らない。

目眩ましってわけじゃ無かったの。

―◇―

「そうだ、アレは痺方陣に必要な道具だ

どこかで見たことがあったと思ったのですが、気付くのが遅すぎました。」

グロウは壁を思いっきり叩いた、拳から血が滲んできた。

―◇―

「な・・・こうなったら。」

青い髪の少女も捕まったように見えた直後、青年が兵士達の方に走って行こうとした。

「危険だぞ、死ににいくようなものだぞ。」
服を掴んで止めようとするが、直に振りほどかれてしまった。

「私だけではなく、町の他の人たちも同じ気持ちですよ。」
周りを見ると次々と町の人たちが兵士達の走っていっている
どう考えても無理だ、いくら人数で勝っていようと力量が違いすぎる
厄介なことに人数が多すぎるから全員を止めるのも不可能
このままだと大量の死人が出るぞ！！！

ボン
鈍い爆発音。
兵士達のいる場所にある変な機械に、凄く見覚えのある槍が刺さっている。
その槍の持ち主は、サッと槍を回収すると青い髪の少女の所に行った。

「誰だ！！貴様何をしたのか解っているのか。」
兵士達が持っている剣を槍の持ち主に向ける、向けられた本人は意に介していないようだ。

「えっ、あんたは確か。」
青い髪の少女が槍の持ち主の顔を見て驚いている。
あの二人に面識があったことに驚いた。

「痺方陣に必要な道具は破壊した、速くあの子を助けてここから離れよう。」
青い髪の少女は頷いた、と同時に捕まっていた少女と共に消えてしまった
気がついたら槍の持ち主もいない。
一瞬の出来事に町の人達は少し戸惑っていたが

少女達が助かったのに気がつくと歓声を上げて喜んでいた。
ディノス・・・何やってんだ。

―◇―

兵士達を振り切り、再び裏路地へ行く。
路地裏に着くなりサラは木のコンテナの上に座った。
各々も椅子になりそうな所に腰を下ろした。

「とりあえず、お礼は言っておくわ、ありがとう。」
サラが溜息交じりでお礼を言う。

「でも、なんで見ず知らずの私達を助けてくれたのですか？」
さっき助けた小さい女の子が不思議そうにこっちを見ている。

「う～ん、少し理不尽な気がしたのと村の人達まで殺されてしまいそうだったからね
　大惨事を見るのは嫌いだから。」
圧倒的なまでの違和感
盗みの罪は恐らく罰せられるべきだと思うが公開処刑はありえない。

「この町を治めているのは、まだコルト・エデュミナスなのか？」
コルトはもう年だ、引退していて、新たに統治者になった者が暴君なのかも知れない。

「そう、コルト・エデュミナスよ
その名前が出るって事は、あなた、この町の事を知っているの？」
頭を抱えていた、信じたくは無いがこの町に住む住人が言っているから真実なのだろう。

「昔、来た事があってね、その時は普通の町だった
コルトはどちらかと言うと有識な統治者だったと記憶しているから
その彼がこんな事をするとは思えないけれど。」

「そうね、確かに数年前まではそうだったわ
ただ、2～3年前に急に人が変わったわ、まるで何かに取り付かれたようにね。」

「2～3年前か、何かコルトに大きな事件でもあった？」

「いや、特に無かったと思う、いきなり、増税して、軍備を増強してだったからね」
サラは、はぁとため息をつく。

「そうか」
理解ができない、最後に会ったのは数十年前になるが、町の人たちを大事に思っていた人だ。
こんな人道的にありえない政策をとるなんて、本人に会いにいくしかないか。

「まさか、城に乗り込んで本人に直接聞こうかとか思ってる？」
サラがこっちをジーッと見ている。

「ははは・・・流石にそんな事ないよ。」
否定してみるものの、サラからの疑いは晴れた気がしない。

「それに、仮にあなたがコルトと親しくても説得するのは不可能よ、
既に数人そのような事で側近の人が殺されているみたいだから
あなたも殺されるのがおちよ」

「う～ん、それでも気になるから会いに行くよ、死なない程度には気をつけるよ。」

ドンッ

服の襟をつかまれて壁に押し付けられる。

「死なない程度にはって、あなたどれだけ危険かが解ってるの！！」
サラの言い方が荒々しくなった
その目には怒り以外の他の感情も混ざっているように見えた。

「いたた・・・危険なのは覚悟しているよ」
異常なのは街の雰囲気で解る、過去に回った町でもこういった雰囲気の町はあった
だから、覚悟しないといけない。

サラと睨み合う。

「覚悟・・・ね。」
サラが『あたしにもそれくらいの覚悟があったらな』と呟いて手を離す。

「よしっ、決めた、たしもコルトに会いに行く。」
サラが何を思ってか急にそんな事を言い出した。

「え・・・？」
呆気にとられてしまった。

「一応はコルトと面識あるのよ」

サラはしれっとそう言った。
「サラ姉ちゃんが王様と知り合いだったとは、以外。」
ティセの言い方は驚いていると言うより、どちらかと言うと呆れている風だった。
「まぁね、あたし程になると世の大統領さえお知り合いなんだから。」
サラはそう言って高笑いをする。
「一気に胡散臭さが増したんだが」
「世の大統領が、ってのは確かに勢いだけで言ったけど
コルトと知り合いって言うのは本当よ。」
サラがクスリと笑う
「正確には両親が側近を勤めていた事があってね、その時に少しお世話になったのよ。」
「そうだったのか・・・まてよ、と言う事は。」
とまで言って、自分の言った失言に口を噤む。
「そう、殺された側近の人って言うのはあたしの両親も含まれてる
優しくて、正義感の強い両親だった
捨て子だったあたしを拾って育ててくれた位だしね
コルトの性格が急変して
大幅な増税と軍備増強をやり始めたと時に直に反対しに行ってね
多分一番初めの犠牲者だったんだと思う」
サラは目を伏せて、声のトーンも少し下がってしまった。
人の辛い思い出を思い出させてしまう事に、罪悪感を覚えた。

「はじめて、サラ姉ちゃんの過去の話を聞いたよ、
色々大変だったと思うけど、そんなの気付かせずに、いつも頑張ってて凄いよ。」
ティセはサラを下から覗き込んで、必死に背伸びをしながらサラの頭を撫でている。
この子なりにサラの事を案じて、元気づけてあげようと思っているのだろう。

「そっか、昔の事を話のは初めてだったかな。」
サラはそう言って空を仰いだ。
背の高い家に囲まれ、の見える範囲はほんの少しない空を。

―◇―

ティセに言われて気がついたけど、両親の事を思い出すのも久しぶりだな。

「・・・だ・・・・・・」

瞬きをする瞬間程の少しの間目の前にノイズが走り。
聴こえてきた声はフィルタがかかっているかのように微かにしか聴こえない。

「さ・・わ・・・も・・・だ」

次のノイズは一層強くなり。
視界は青と赤と茶色が混ざりひび割れている。
なんとも気味が悪い、フィルタ越しの声も少し聞きやすくなった。
この声、聞き覚えがある、知っている？

「サラ、私達はもうダメだ・・・」

ノイズは一瞬にして風景に変わる。
その風景にさっきまで見た青空は無い。
変わりに紅い広間が広がっていて
血塗れの男女が倒れていたその傍らには泣きじゃくっている青い髪の子供
あたしはその子供の後ろに立っているカタチでソノ場所にいる。

あぁ・・・泣いてるこいつはあたしだ。

そうか、此処は両親の最後を見取った場所。
そして、両親の最後の言葉を聞いた場所。

「コルトを怨まないで欲しい、あれはコルトの意思ではない
首筋に禍々しい痣があった、あれは人為的な物、そうあれは・・・」
父はゴホッと大きく咳き込む、口から大量の血液を吐き出しながら。
もう、それから二度と動く事は無い事をあたしは知っていた。

それを知らない小さな私はずっと
『おきてよぉ』
と泣きながら両親の亡骸を揺すっていた。

再び激しいノイズ
次の瞬間にはあたしは裏路地のさっきいた場所に戻っていた。
さっきまでの映像は何を伝えたかったのか
嫌なものを見た事で少しの喪失感があたしを襲う。

「首に禍々しい痣・・・人為的な？」
最後に父のいった言葉をぽつりと呟いた。
それを聞いて目の前に立っている青年の表情が一瞬で変わった。
唇に手を当てている目線は一点を見て動かない
恐らく、その一点すら見えていない。
青年の記憶とポツリと語ったあたしの発言
それらの照合に全神経を集中させているのであろう。

「まさか・・・あの魔法を使われているのかでも、コルトは確か。」
青年はそう言って、ありえないと言った言葉を繰り返している
ただ、そうとしか考えられないとも。

「魔力（リジェクトマジックアイ）を排斥する目を持っているから
魔法にかかるはずがないと言う事ですか？」
今までずっと黙っていたグロウが謎めいた単語を言う。
魔力を排斥する目って何？
青年は何故解ったんだと驚き、目をまるくしてグロウの方を見ている。

―◇―

「魔力を排斥する目は直視した空間の魔力の流れを崩すものであって
魔法が効かなくなるって代物ではないですよ、昔の文献にもありますが・・・」
グロウは昔の例を挙げつつ、淡々と説明を続ける。

「そうだったのか。」
いくつか文献を読んだり、実際にその目を持った人と会って来たがここまで詳しい人間に会ったのは初めてで、あいた口が塞がらなかった。

その目を持った人物より詳しいって、この子供はどれだけの知識が豊富なんだろう。
膨大な知識量とそれらを引出してくる速さ、それは優秀な検索機能を持ったデータベース。
初対面である筈ながら、この少年にどこか懐かしいものを感じていた。

―◇―

「結論として、コルトは操られているって事？」
サラが普段は見せないような深刻な顔つきでその言葉を言った。

「実際に痣を見ていないから、多分そうだとは言えませんけどね。」
実際に実物を見ないと結論は出せない
首に出来た痣と状況証拠だけでは情報が足り無すぎる。

「でも、グロウがどうしてそんな事を知っているの？」
ティセが少し驚きながら、尊敬の眼差しでグロウを見ている。

「何故って・・・あれ？何を？」
状況が全く理解できない、僕が何を知っていたんだ？

―◇―

「グロウまた記憶が飛んだの？」
ティセが心配そうにグロウの方へ駆け寄っていく

「そうみたい、やっぱり思い出せないや。」
グロウがうーん、と少し唸ってから、軽く首を振った。

「記憶が飛ぶ？」
少し気にはなるけれど、本人や周りは余り気にしてなさそうに見えた。

「少し前ぐらいからね、気がついたら暫くの記憶が無かったりするんだ
で・・・此方のお兄さんは誰？」
グロウがこちらを指差し、首をかしげている

「この人はあたしとティセを助けてくれた・・・ってまだ名前を聞いてなかったね。」
サラは可笑しかったのか、ははははって軽く笑った。

「僕の名前？そういえば言ってなかったね、僕の名前はディノス・ヴェルンだよ。」

「そしてこのディノス
今からコルトの居るエデュミニオンの城に殴り込みをかけに行くそうです。」
サラはグッと拳を握ってそう言った。

「いや、流石に今からは行かないよ。」
肩を落として、溜息をついた。

「なら、何時行くの？」

「行くとしたら夜だね。」

「夜・・・夜襲を仕掛ける気？なんと大胆な計画を」
サラが少しあとずさって驚いている。

「別に夜襲を仕掛けるわけではないよ
今行ったら兵士に囲まれて捕まるのがおちだろうからね。」
それに、今の姿じゃなくて、魔王の姿で行かないと意味が無い。

「言われてみればそうだよね、ディノスも完全にやつらに顔をさらしてしまってたし。」
サラは腕を組んで、むぅっと唸った。

「じゃあ、日が沈んでから、この場所に集合と言う事でいい？
ディノスはそろそろ一緒に来ていた人たちと合流しないと
心配して探し回ってるんじゃない？」
サラが心配そうにそう言った。

「そうだね、しかも財布は僕が持っているし。」
ウィル達に何も言わずに追いかけてきたわけだし、多分苛ついてるだろうな。

「それに、やっぱり来るんだね。」
できれば来てほしくは無いけれど。

「うん、あたしもコルトに会わなきゃいけないから」
サラの目は一点の曇りもない決意に溢れていた。
その目を見たら来るなとは言えない。

「では、また後で」
サラ達と別れて路地裏を後にした。
ウィル達は町の入り口の辺りで見知らぬ青年と雑談をしていて
その雑談に参加する形で合流した
合流してからの雑談の内容は自然とサラ達の話になった

雑談中にふと青年の気配が全く無い事に少し違和感を覚えたが気のせい程度に留めていた。

監獄の町（中編）

首にできる
禍々しい痣
食い破られる自我
ようこそ
醜い性格をした
新しい自分

この痣は
魔法を使われた事の証

通常洗脳系統をする魔法
そもそも
それらの魔法自体
禁術の類に入るのだが
大抵
術者・洗脳された被害者共々に
痕跡を残さないよう考慮され作られている

ただ、それは違った
ワザと魔法によって洗脳されている事を印している

初めて解った事が一つ
この魔法を使われた者の自我は無くならない
ただ
行動している自分が違うだけ
本来自分で在った者は
自分の意思などと全く違う言動・行動を行っている

まるで『自動人形』
己が凶行を目の前にしていても何もできない歯痒さ
大切な人々を手にかける様を目の前に見せ付けられる絶望

誰でもいい
一刻でも早く
私を
殺してくれ

◇

日が沈み、オレンジ色の景色は闇色に変わっていく、そろそろ出発するとしよう。
結局、『今日は宿に一泊し税対策は明日考えよう』、とウィル達に言って一日この町に滞在してもらうようにした。

ウィル達に気づかれると面倒そうなのでこっそりと宿から出よう。

「あれ、ディノス何処か行くの？」
宿の出入り口で早くもレイに見つかってしまった。

「少し用があってね、ちょっと出てくるよ。」

「今日のお昼のこともあったし、何か危なそうな事に首つっこんでない。」
レイが心配そうな面持ちでディノスを見ている。

「ちょっと古い友人に会いに行くだけだから、大丈夫だよ。」

「そうならいいけど、気を付けてね。」

「じゃぁ、行ってきます。」
そう言い宿を出たあと、裏路地まで一気に走っていった。

◇

裏路地はしんと真っ暗に静まりかえっていた、誰か居ないかと見回していると、グロウが目を擦りながら、こっちに来た。

「御免、起こしちゃったかな、サラは居る？」
少し闇に目が慣れてきてうっすらと見えるようになってきた、ティセが寝ているのは見えたが、サラの姿が見えない。

「あれ？一緒じゃないんですか？」
グロウが首を傾げている。

「えっ？」

「サラ姉は少し前に出て行きましたよ。」

「えぇっ！！」
何故一人で行っているんだ、俺も急いでいかないと。

「起こして御免ね。」
そう言って、急いで城に向かった。

◇

声と雰囲気で昼間の青年とはわかったが、さっきあった青年は見た目が全く変わっていた。

銀色の髪に金色の瞳、その姿には見覚えがある気がするが思い出せない、ただ、何故が目からあふれ出す涙が止まらなかった。
私は先程の銀色の髪をした青年を知っている？
全力で、うっすらとした記憶を辿る、深く辿った先に幼きその顔があった。

「そうか、もうあそこまで大きくなったのですね。」
やっと思い出せた、私が何者であるのか。
行かなければいけない、私もあの場所へ。

◇

ディノスを置いていく、その判断をしたのはディノスと別れてすぐだった。
軟弱そうだし、危険を顧みずに人を助けに来るほどお人好しだし、いくら夜の方が警備が薄いかもって言っても、ちょっとしたことが原因であっさり捕まりそう。

クスッと少し笑った。

それに、あたし一人の方が都合が良いって事もあるし。
コルトは操られていると言っていた、操られているのならば、説得は意味をなさないだろうし、それにもし万が一元のコルトに戻ったとしても、操られている間自分のしてきたことにコルト自身が耐えられないと思う。

だから、いっそこの手でコルトを暗殺する

ずっと迷っていたけど

今日やっとその覚悟がやっと出来た。

音も立てず近づき標的の命だけを奪い音も無く去る、それだけを目的とした暗殺術、あたしは両親が殺されてからソレを身に付けることになった、ソレを習得した。ソレの使い手の人に会うことが出来たのは運が良かったのだと思う、多分。

◇

城の窓から夜空を見る
今日は満月だった
今宵は月が赤く見えた
昔から赤い月は災いが起こる前兆として恐れられていた事を思い出した。

災いが起こって欲しかった
自らを滅ぼす程の災いを。

首筋に何か冷たいものが触れた
ナイフだった、体は激しく抵抗し、暗殺者を突き飛ばして私は床に転がった。

暗殺者の一瞬の躊躇
ソレが生死を分けた、ナイフをそのまま引かれていたら首の動脈をスパっと切断されて血が噴き出し、即死だっただろう。

この暗殺者、技術はあれどもプロではない、プロならば躊躇はしない、対象が存在に気付いたときには、既に対象は死んでいる。

地面に張った体が暗殺者の方向を向く。
その暗殺者の顔を見て驚いた、知った顔だった、昔は良く両親と一緒にこの城に訪れていた子だ。
その子の両親を私は殺した、復讐されても仕方が無い事。
赤き月が災いを運ぶと言うのは本当なのだろうと信じたくなってしまった、私の友人達まででなく友人の娘さえ殺させようと言うのか。

◇

何が『覚悟を決めた』よ、思い切り躊躇をしてしまっているじゃない、タイミングは完璧だった、後はナイフを引くだけでよかったのに、それでコルトを楽にさせてあげることが出来たのに。

「ふはははは、両親を殺された仇を討つ為に単身で乗り込んでくるとは面白い。」
コルトが薄ら笑いをうかべゆっくりと立ち上がった。

「貴方は一体誰、やっぱりコルトとは違う。」
その話し方、佇まい、やはりそれら全てがあたしの知るコルトとは全く違う、あたしはその人物にナイフを向けた。

「誰・・・誰と言われたらコルト・エデュミナスとしか答えようが無いが。」

「違う!!」

「違う?何故違うと言い切れる、貴女が知っている私は貴女が小さいときの記憶に過ぎない、幼い子供の記憶はなぞ曖昧なものでしか

ないだろう、脳内で過去の私が美化されているだけではないのか。」

「あたしは知ってるんだからね、貴方の首にあるその痣がコルトを操っている事を。」

「ほう、これを知っているのか。」

コルトが首の痣を撫でる様に触った、禍々しいと言う言葉が本当に良く似合う人の顔を模った痣、まるで断末魔が聞こえてきそう。

「まぁ、知っていた所で、どうと言う事は無いのだが。」

「一体何が目的でこんな事を。」

「さてね、ソレは呪いをかけた人物にでも聞くんだね、私は只遠方から届く指示に従って動いているだけでしかない。」

コルトは飄々とした態度で答えた。

「その指示を出しているのは誰？」

「貴方に教えたところで解らないだろうし、話す意味も無い。」

コルトはふぅと詰まらなそうに溜息をついて天井を眺めた。

「しかし、死にに来た人らは如何して毎回同じような事を聞くのかね、正直飽きたよ。」

コルトが目をこちらに移した、圧倒的な威圧感、蛇に睨まれた蛙の気持ちが良く解る、怯んだらいけない。

コルトに向かってナイフを投げた、ナイフはサラの手から離れコルトの頭へ一直線に飛んでいった、コルトは首を少し動かしナイフをかわした、ナイフは軽い音をたてコルトの後ろの壁に突き刺さった。

「的の小さい頭を狙うとはナンセンスだ」
サラがコルトの言葉を遮る様に手をナイフの方に翳した。

「爆発しろ。」
ナイフに向かって大声で叫んだ、ナイフはソレに呼応するかのように激しく振動し、ナイフの周辺に激しい爆発が発生した、レンガ造りの壁は粉々に砕け砂埃が部屋を覆った。

「これは驚いたまさか爆発するとは、見た限りでは仕掛けは解らないが、仕込みナイフの一種かな、だが残念、これしきの爆発で私を殺せるとでも思いましたか。」
砂埃が晴れてきた、コルトは平然とその場に立ち拾ったナイフをまじまじと眺めている。

「ふむ、これは・・・そう言う事か、ふはははは、面白い。」
コルトが顔に手を当て、天井を仰ぎながら、高笑いをしている。

「そうか、まさかこんな所に居たとは。」
何を言っているのか、さっぱり解らない。

「殺してしまおうかと思っていましたが、予定を変更せざるを得なくなりましたね。」

「しかし、暗殺されそうになっておいて、何もしないのでは此方の腹の虫が治まりませんし、どうしたものか。」
コルトが目を瞑り腕組みをしてうんと唸っている、その姿が物凄く隙だらけに見えるけど。

素早くナイフをコルトに向かって投げる、コルトはナイフの気配を

察上がるようにして避けた。

この一本は囮も兼ねている、そして避けた所を最後の一本で仕留める、避けた場所の角度・タイミング完璧だ！

って、あれ？ナイフが一本足りない、額から汗が染み出てくる、無い、何故、何時、何所で。

ふと、昼下がりの光景を思い出した。

しまった、ディノスの影にさしたナイフを回収するのを忘れてた、肝心な時にこんなミスをするなんて。

「そうだ、この城の兵士達に犯させるって言うのが良いかな、普段からこの娘に物をすられて鬱憤が溜まっているだろうしな、目の前で親しき友人の娘が犯される様を只見るしかできず助ける事ができないとは、コルトの精神も流石にもたないかもしれないなぁ、双方な悲痛な叫びを聞くことを想像しただけで最高に興奮するよ。」

コルトの笑いが一層高くなりもはや笑い声では無くなっている、狂っているとしか表現できない。

まだだ、まだあそこに刺さっているナイフの力を発動させれば、チャンスはあるはず。

ナイフの能力を発動させようとした瞬間、体が動かなくなった、指一本でさえ動かせない、一体何が起きたのかわからない。

「此処に刺さっているナイフの能力を発動させられては困るかもしれないですからね、ソレと舌でも噛まれて死なれてしまったら、折角の娯楽がつまらなくなりますしね、そもそも死なれてしまったら困りますし。」

コルトは大声でこの城に居る兵たちに集合をかけた。

数分たっても兵たちが来る様子が無く沈黙だけが流れていった。
少しだけホッとしたのもつかの間、人の走ってくる足音を聞こえてきた。
入り口から入ってきたのは、金色の髪をし、銀色の目をした青年だった。

「よかった、無事だったか。」
青年が力が抜けたかのようにガクリと肩を落とした、ってあれこの青年は昼間の・・・

「ディノス？なんで金髪になってるのよ、それに、この状態が無事に見えるの。」
ディノスは顔を上げて、あぁと呟いた、少し口を動かしたかと思うと、あたしの体がすっと軽くなるのを感じた、ディノスはコルトの方を見て、そして首筋の痣を見た後、少し悲しそうな顔をした。

「久しぶりだね、コルト・エデュミナス。」
ディノスが静かに言った、その言葉は目の前に居る人物ではなく、更にその奥、目の前の人物の内面にいるコルトに向かって。

「ちっ、計ったかのようにタイミングの良い出方をしますね、ディノ・ヴェルン。」
コルトは面白くなさそうに悪態をついた。
ディノ・ヴェルン？ディノスじゃないの？と言うか私は置いてきぼりですか。

◇

「本当に知り合いだったの？」
サラは目を丸くしている。

「そうだって、言ってたじゃないか。」
肩を落としてため息をつく、このやり取り何度目だろう。

「ただ、今、目の前に居る人物はコルトの記憶を持っている別人だけれどね、まったく厄介な魔法を。」
コルトの首の痣を見て怒りがこみ上げてきた、こんな魔法を使うような輩が居る事とコルトがその被害にあった事に。

「ディノ？は魔法の解き方を知ってるの？」
名前を呼ぶときの語尾が上がっていた、やはりディノと呼ばれた事に疑問を持っているのだろう。

「ディノスで良いよ、知っていることは知っているけれど、厄介だね。」

「厄介？解くのが面倒くさいって事？」

「まぁね、俺が治癒系・解呪系の魔法に余り向いていないのと、相手がコルトで在るということ、特に後者が問題なんだけどね。」

「なんで？」

「あの魔法を解く魔法を使おうとしたら、詠唱に時間がかかるんだ、詠唱中に魔力を排斥する
目を使われたらアウトだしね。」
魔力にモノを言わせて、強力な魔法を使う事なら得意なんだけどなぁ、特に解呪系の魔法は丁寧に詠唱しないと直に失敗してしまう、少しでも魔力の流れを崩してしまったら初めからやり直しになってしまう。

中には詠唱を必要とせず、完全な魔力の流れを発生させて解呪をする天才も居るけれど。

「その詠唱に掛かる時間は何分くらい？」
サラが静かにそう聞いて来た。

「およそ十分」
ギュッと唇を噛む、どんなに少なく見積もっても、十分掛かってしまう自分にイラついた。

「十分か・・・」
サラが唇に手を当てて、少し考え込んだ。

「よしっ、その十分あたしが稼いであげる。」

◇

「さて、そろそろ作戦会議は終りましたか。」
コルトは待ちくたびれたと言わんばかりに欠伸をした。

「作戦と言うまでのモノでも無いけどね。」
ディノは呆れた顔をしている。

「余裕顔をしていられるのも精々十分程度よ。」
サラはコルトとの距離を一気に詰めた、ソレと同時にディノが詠唱を始める。

「成る程、自らの体を盾にディノの居る場所を見させないつもりか。」

コルトが動くとソレに合わせて動く、サラはディノの姿を見られ魔力を排斥する目を使用されるのを防ぐため、常にコルトとディノの間を挟む位置に居るように心がけていた。

「だが、この至近距離、魔法を回避する事など出来ないだろう。」
コルトがサラの方へ手を翳す、オレンジ色の火球が三つサラの方へと飛んで行った。
しかし、サラに触れる直前で綺麗さっぱり消滅した。

「なに・・・打ち消された。」
二・三度同じように魔法を使ってもどれもサラには届かない、サラの前で無と化していた。

「びっくりした、この槍凄いね。」
サラの右手には白銀の槍が握られていた。

「なんだその槍は。」
業を煮やしたコルトが叫んだ。

「秘密兵器」
サラは語尾にハートでも付くのではないかと言う程のご機嫌な声で、楽しそうにそう答えた。
一進一退、魔法は尽くディノから借りた槍で全部回避できるし、コルトに接近されたとしてもあたしの方が速い、常に一定の距離をとり続けていられる。

・・・長い、まだ4～5分と経っていないけれど、既に数十分経っているかのような錯覚を感じてしまう、一定の距離を保つ事、ディノを見られないこと、気を抜く事ができない事がここまで負担になるなんて。

でも、そろそろ折り返し地点、コルトも魔法を使う事を諦めたのかずっと移動しているだけだし、何とかなりそう。

「魔法は封じられ、常に一定の距離を保たれているため距離を詰める事もできませんか、これは本格的にやばそうですねぇ。」
コルトは軽く後方跳躍した。

「ただ、常に一定の距離をとるという事は一定以上近づかれる事も無いという事、ましてや、ディノの詠唱を止める術が無いが、私のこれから起こす行動も止める術が無いでしょう。」
コルトは壁に張り付くように立ち怪しく笑う。

「高々スイッチを押す程度ですがね。」
コルトが壁のレンガを押す、レンガはゆっくりと奥の方へと沈んで行った。レンガが見えなくなった、と同時に激しい揺れ、続いて咆哮、鈍く空気を揺らすような騒音

「なに・・・これ。」
一瞬、外に気を取られた、穴の空いた壁から昔話でしか聞いた事の無いような、ただただ巨大な動物、どんな建物よりも遥かに高く、どんな建物よりも遥かに重い。

「カデンテイア、ドラゴンの一種ですよ、さて、コイツが町で暴れだしたらさぞ甚大な被害がでるんでしょうね、まぁ、道ずれってやつですよ、私が消える道ずれに、この町全てをね、幸いこの町に来る様な冒険者は稀、特にドラゴンに対抗できるような冒険者となれば更に稀。」
コルトはサラ越しにディノを見た。

「唯一この町で対抗出来得る者も詠唱で動けなくなっていますしね、詠唱終了まで恐らく約三分ほど、カデンテイアにかかれば滅ぼすのに三分も有れば十分でしょう。」

「ディノ、あいつが言っているように貴方ならあのドラゴンを討伐することができる？」

ディノの方を振り返る、ディノは詠唱をしながら軽く頷いた。

「だったら此処は良いから速く町に行って。」

ディノは少し考えた後、詠唱を止めた。

「・・・解った、ヴェアフルは預かっておいて、それがあるとコルトも魔法を使えないからね、あとこれ忘れ物。」

ディノがナイフを軽く投げて渡す、サラは手馴れた様にソレを受け取った。

「危ないわね、ナイフを投げて渡すなんて、刺さったらどうするつもりなのよ。」

「それじゃあ、あのドラゴンを黙らせてくる。」

ディノが穴の開いた壁の所まで歩いていった、其処からドラゴンの方を眺めている。

「さっさと黙らせて、速く戻って来てよね。」

ちょっと其処まで出かけてきますと言う様に、ディノは右手を上げて左右に振った、跳躍し穴の開いた壁から外に飛び出す、ふと此処は何階だったかと思った、結構な高さはあったはずだけど大丈夫なのかな。

◇

城に入っていく人物が見えた、一体誰だろうと気になったが、今はそれ所では無い、あんな物騒な魔物を召喚するとは、しかも、どうやって召喚したんだ、召喚に必要な魔方陣も見当たらなかったし、別段巨大な魔力の動きも感じ取れなかった、いや、ソレを考えるのも今は止して置こう、ただ、目の前に居るドラゴンが町を破壊しだす前に黙らせないと。

カデンテイアが空気を吸い込んでいる、腹の大きさが2、3倍に膨れあがっている、炎を吐く気だ、あんなのに吐かれたら町は忽ち火の海と化してしまう、まだ距離が結構ある、間に合うか？いや、間に合わせる！！

屋根から屋根へと飛び移る、速く！もっと速く！！気ばかりが焦って全然距離が詰めれている気がしない。

カデンテイアが上空を向く、もう時間が無い、距離は十分とはいえないが、魔法を使わざるをえない。

ふと、町のほうから巨大な魔力の反応を感じた、一瞬気をとられて町にシールドの魔法を張れなかった、そして張る必要も無かった、巨大なシールドが、俺が使うよりも圧倒的に安定しているシールドが町全体を包み込んでおり、カデンテイアが吐いた炎をいとも容易く防いでいた。

一体誰が・・・いや、今はそんな事はどうでも良いか、あのシールドが何時まで持つかわからないし、一気に終らせないと。

◇

やっと到着した、目の前に聳え立つカデンテイア、近くで見ると本当にでかい。

「さて、さっさと元の次元に返ってもらいますかね。」
右手をカデンテイアの方へ向ける、ぶつけるのは圧縮した魔力の塊、それは一瞬でカデンテイアの心臓を貫いた。

カデンテイアの体は光の結晶となり、その場から消え去った。

町に張るシールドに使う筈だった魔力を攻撃の為するための魔力に使えたのは少々運が良かった。

下手な威力で下手な場所に当てて大暴れされたら困るし、何より苦しませずに送り返すことができたから。

「しかし、一体誰があのシールドを張ったんだろう？」
シールドはカデンテイが消えたと保々同時に解かれていた。
まぁ、気にしていても仕方が無いか、急いでサラの所まで戻らないと。

「あれ、ディノスなんでこんな所にいるの？」
聞き覚えのある声、後ろを振り返るとそこにレイが立っていた。

「人違いじゃないのかい？俺はディノスって名前じゃ無いし、あなた会ったのも初めての筈だけど。」
ここは他人の振りをしていた方が良いだろう。

「なにを惚けてるんですか、私が友達を間違えるわけ無いでしょう。」
レイがニコリと微笑んだ。

色々髪の色とか目の色とか違うんだけどなぁ。
「ってディノスいつの間に髪を染めたの？銀色になってる。」
レイがようやく髪の色の違いに気付いて驚いていた。
「染めたって、一応地毛なんだけど。」
右手で髪を軽く弄りながら答えた。
「地毛・・・という事は普段は黒に染めてるの？」
レイは首をかしげた。
「いやいや、別に染めてはいないよ、この状態の時だけこの色になる感じだね。」
「この状態？」
レイは難しそうな顔をしている。
「そう、魔王ディノ・ヴェルンになってる時だけ、魔族特有の目にこの髪の色になるんだ。」
しまった、レイの雰囲気に呑まれてついつい魔王である事を話してしまった。
「魔王って、まさかウィルの探している魔王ってディノスのだったの？」
レイは驚愕した表情になった。
「とかまあそんな設定だったら面白いかもねって話でした、俺とディノスって奴とは関係ないし、レイはそろそろ宿に戻って寝てきたら、あれだけでかいシールドを張ったんだし疲れてるだろう。」

あぁ、焦っているのか自分でも何を言っているのかわからなくなってきた。

「ディノスって嘘が下手ですね、多分この町で私の名前を知ってるのはウィルとディノスだけなのに私を名前で呼んだり、でも今回はそんな話だったら面白いねって事にしておきますよ、なんだかまだやることが残ってるみたいだし、でも、帰ってきたら教えてね、なんで魔王である事を隠してウィルと旅をしてるのかとか色々。」
レイはクスクスっと軽く笑っていた、さっきまでの驚愕していた表情が嘘のよう。

「わかった、帰ってきたら話すよ、でもウィルには内緒でお願いします。」
ウィルの旅の理由も聞いてるのだから、これは俺のほうも話しておかないといけないよな魔王だといってしまったのだし。

「わかりました、気をつけて行って来てね。」
レイは心配そうな表情でディノスを見つめた。

「うん、でも心配は要らないよ仮にも魔王だし。」
レイに手を振ってわかれた、城の方に向かって走り出す。

城の壁の穴から再び城に入って、そして、其処の風景を見て一瞬思考が止まった、既に決着がついていたから。

城の中ではサラが倒れていたコルトの傍に居た、そしてサラの隣にグロウが立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1703d/

Madeniter

2010年10月10日19時56分発行